HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	東南アジアの人間像と日本経営史の原像（2）
著者	大場，四千男；OBA，Yoshio
引用	北海学園大学学園論集(149)：1-68
発行日	2011-09-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

東南アジアの人間像と
日本経営史の原像（二）

大　　場　　四 千 男

目　　次

はじめに
１編　チベット仏教と人間像
　序
　１章　中央アジア騎馬民族王朝とチベット帝国の勃興
　２章　遊牧騎馬民族王朝とチベット帝国
　３章　チベット仏教と勤労倫理
　　⑴　リンチェン・ドルマの家系とチベット史
　　⑵　チベット仏教と仏教的家族主義勤労観
　　⑶　チベットの荘園制度とチベット仏教の倫理
２編　ブータン仏教と人間像
　序
　１章　リンチェン・ドルマとブータンとの関係
　２章　ブータンの原像－１　中世ブータンの村落の「結」的絆
　３章　ブータンの原像－２　「幸福大国」への歩み
　４章　ブータンの原像－３　遊牧騎馬民族の系譜
　５章　ブータンの原像－４　王室の出自とジクメ家，ドルジェ家
　６章　ブータンの原像－５　農民とブータン仏教＝ドゥク派信仰
３編　ブータン探索
　　～サンジャ・アチャヤ著　女澤史恵訳『ブータン・ヒマラヤ山脈の王国』
　はじめに
　序文
　１章　着陸
　２章　環境と開発
　３章　雷龍の国
　４章　チョモラーリ山：女神の神聖な山（148 号）

4編　東南アジアの大乗仏教と人間像
序
1章　チベット仏教とリンチェン・ドルマ
2章　チベット仏教7派
3章　ブータン仏教とドルジェ・ワシモ
5編　ビルマ（ミャンマー探索）
～リチャード・K・ディラン著　女澤史恵訳『ビルマの消えゆく少数民族』
序
第1章　ビルマの地理的特徴
第2章　民族集団
第3章　民族の歴史（以上迄　本号）

4編　東南アジアの大乗仏教と人間像

序

東南アジアの共通宗教としての大乗仏教は顕密体制を形成し,本地垂迹説を中心にして宗教(仏法）と国家（王法）の一致体制を築き，世界史における中世を特徴づける。すなわち，本地垂迹説はチベットにおいて観音菩薩の化身としてダライ・ラマを法王に位置づけ，チベット帝国のガバナンス構造を育くむ。

他方，ブータンでの本地垂迹説はシャプドゥン・ンガワン・ナチギュルの化身系譜を生み出し，ドルジュ家を王朝家系と見なしてブータンの政治理念を特徴づける。つまり，ブータンの政治理念は菩薩の仏王とインドの法輪王（チャクラヴァルティン）の相互依存体制を形成し，仏教の教えを国民の苦しみの救済便法として応用する仏教国のガバナンス構造を築くのである。

さらに，日本では平安時代の摂関政治から院政政治へ移行し，本地垂迹説に基づく仏法と王法の相互依存体制を生み，顕密体制を政治理念として発展する。この顕密体制は荘園公領制を背景にする武士階級の抬頭（騎馬民族王朝の担い手）と南都北嶺の大乗仏教，或いは皇室・貴族の摂関勢力を三位一体とする新しいガバナンス構造を形成する。

唐から宋への移行は大乗仏教の中で法華経，真言教から浄土仏教への転換を促がし，その浄土経典3部を摂取して体系化する親鸞の浄土真宗を育くみ，顕密体制の内部崩壊を顕現化する。

こうした東南アジアにおける中世への移行は，チベット，ブータン，さらに日本における顕密体制の形成と再編制を生み出し，新しい人間像として開花された人間を育成する。この結果，顕密体制を支える大乗仏教は荘園公領制を基礎にする封建社会と封建的主従関係を仏法の観音信仰

（自力の聖堂門）と阿弥陀仏信仰（他力の念仏門）で包摂し，種姓（＝階級）イデオロギーとして機能とする。このことによって，大乗仏教の現世利益主義は本地垂迹説を背景に荘園の地主＝小作人を家族主義的「結（ゆい）」の結びつきとして位置づけ，家族主義的勤労観と職能民の職業倫理，つまり，生業（なりわい）の種姓化を正当化し，封建社会の人間像を生み出す。

ここではブータン仏教がチベット仏教の延長線上に発展することから，その草の根となるチベット仏教を最初に取りあげる。最後に東南アジアの大乗仏教が主要にチベット，ブータンそして日本の 3 国によって構成され,今日の 21 世紀に至っていることは東南アジアの文化的特徴を形成し，さらにこれら大乗仏教の信仰から生み出される人間像として「開花された人間」を「幸福大国」（GNH）を築く人間類型として設定する日本的経営の原像或いは比較経営史の方法論の対象と見なされる。

1 章　チベット仏教とリンチェン・ドルマ

仏教はゴータマ・ブッダ（釈尊）のブッタガヤーの聖木（ボダイジュ）の下の悟りを機に成立する。釈尊は説法（転法輪（てんほうりん））するためベナレスの鹿の園に向かう。ここで釈尊は 5 人の修業僧に対して説いた「 4 つの真理」を中心とする悟りの説法を行う。中村元はその著『ゴータマ・ブッダⅠ』の中で釈尊の悟り（＝空観）を次のような宗教観として記す。

「それゆえに，修行僧らよ，ありとあらゆる物質的なかたち，すなわち過去・現在・未来の，内であろうと外であろうと，粗大であろうと微細であろうと，下劣であろうと美妙であろうと，遠くにあろうと近くにあろうと，すべての物質的なかたちは ――「これはわがものではない。これはわれではない。これはわれの我（アートマン）ではない』と，このようにこれを如実に正しい叡知によって観察すべきである。

ありとあらゆる感受作用は……ありとあらゆる表象作用は……ありとあらゆる形成作用は……ありとあらゆる識別作用，すなわち過去・現在・未来の，内であろうと外であろうと，粗大であろうと微細であろうと，下劣であろうと美妙であろうと，遠くにあろうと近くにあろうと，すべての識別作用は ――『これはわがものではない。これはわれではない。これはわれの我（アートマン）ではない』と，このようにこれを如実に正しい叡知によって観察すべきである。

修行僧らよ，このように見なして，教えを聞いたすぐれた弟子は，物質的なかたちを厭うて離れ，感受作用を厭うて離れ，表象作用，もろもろの形成作用，識別作用を厭うて離れる。厭うて離れるから，貪りから離れる。貪りから離れるから，解脱する。解脱したときに，〈すでに解脱した〉と知るにいたる。『生存はすでに尽きた。清らかな行ないは修せられた。なすべきことはなされた。もはやこの世の生存を受けることはない』と確かに知るのである。」

世尊はこのように説かれた。五人の修行僧の集いはこころ喜び，世尊の所説を喜んで受けた。そしてこの〈決まりのことば〉が述べられたときに，集（つど）うた五人の修行僧は執着なく，もろもろの煩悩から心が解脱した。

そこでそのとき，世に六人の〈尊敬されるべき人〉がいることになった。」

（中村元選集第 11 巻『ゴータマ・ブッダⅠ』，511-513 頁より引用）

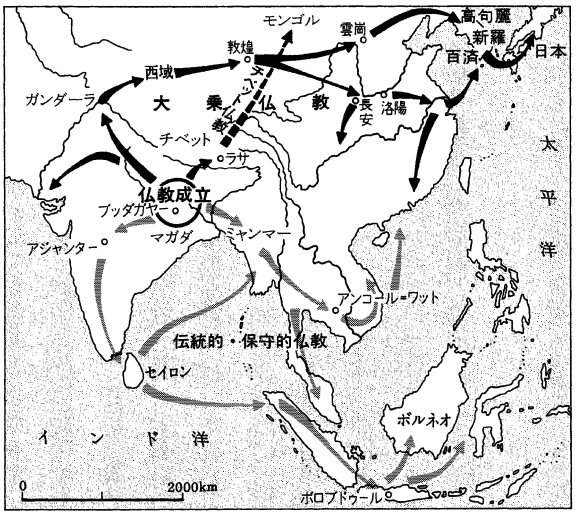
釈尊はありとあらゆる感受作用（受），表象作用（想），形成作用（行），識別作用（識）を「我

ならざる」無常（＝空）そのものであると説く。また，物質は「無常」であり，懐滅する本性であるから過去・現在・未来において「厭うて離れ」，又は「貪りから離れて」受けることのない，心の解脱（智慧）に達する。こうした智慧を悟り，無知の闇から脱け出す開花した人間として清らかな行いを修する空観の教えは大乗仏教の密教としてインドからチベット，ブータン，中国，日本へ伝播する。仏教がゴータマ・ブッダの上記した悟りの経典の解釈を巡って大乗仏教と小乗（上座部）仏教とに分裂して東南アジアに広がるが，このことは次の図によって窺える。

中村元は7世紀に大乗仏教が上座部仏教（小乗）を批判する形で形成され，図-1のようにブッダガヤのインドから南方への小乗仏教ルートに対し，北方への大乗仏教ルートとなり，東南アジアを席巻していくと考える。ちなみに中村元は小乗仏教を「巨大な僧院で教理研究」に専念する，所謂顕教の側面を強めると考える。他方の大乗仏教は「慈悲に基づく利他行」を重視し，空観の倫理としてカルマと輪廻を両輪にする，所謂密教の神秘性の側面を重要視するものである。

大乗仏教を以上のように概観し，次に人間がこうした宗教観を強く意識するのはどういう時であろうか。多くの場合，(1)親類の葬式と火葬に立ち合う場合，或いは，(2)死の危険に直面する場合，さらに，(3)『平家物語』の平氏一族の懐滅場面を想定する場合等に要約することが出来る。『チベットの娘』を書いたリンチェン・ドルマは運の悪いとしかいいようがないが，これら3点のいずれの死，或いは一族郎党の懐滅に遭遇し，その都度チベット仏教の空観（＝無常観）から生きる智慧を悟り，無知の闇の苦しみから解脱する。それゆえ，チベット仏教はリンチェン・ドルマの『チベットの娘』に依拠しながら明らかにし，さらに，リンチェン・ドルマと接するチベット

図-1　仏教伝播の2ルート



濃い印　大乗仏教

薄い印　小乗仏教

（中村元現代語訳大乗仏典1『般若経典』，31頁より作成）

への留学僧多田等観のチベット仏教論で補(おぎな)う。

リンチェン・ドルマが身内の死に直面するのは1912年である。この年に父ツァロン・ワンチェク・ギェルポ（(1866-1912)（内閣の俗官長老大臣（首相））と兄サムドゥプ・ツェリン（1887-1912）とが同時に軍務局の陰謀で暗殺されるが，この時，彼女は2歳の子供で，泣き衰えた母が仏への教えに沈殿していくのを次のように感じた。

夫と長男が無残な死を遂げてからというもの，母の健康はすぐれぬままでした。そんな母の心の救いになったのが，常日頃から従ってきた御仏の教えでした。仏教は，癒えることの知らない母の悲しみを和らげ，また，生きとし生けるもののあり方についての理解を深めさせてくれました。病によってたびたび妨げられはしたものの，母は瞑想したり，お経を読んだり，日々の祈りを上げたりすることを決してやめようとはしませんでした。

（リンチェン・ドルマ，前掲書，45頁より引用）

8歳になり，ラサのキレ学校に入学したリンチェン・ドルマは文殊菩薩(ジャムペーヤン)讃歌経典を先生の指導の下で歌い，チベット仏教の智慧に次のように触れる。

汝の慈愛は生きとし生けるものに等しくふりそそぎ，
雷鳴にも似た汝の声は，無知の羊を目覚めさせる
汝の魔法の剣は，一切の苦を源から断ち切り，
汝の慈愛に満ちた智慧の輝きによって，
私のこの無明が断ち切られ，
仏陀の教えを正しく解することができるよう，
どうかこの私を勇気づけ，偉大なる教えを理解させてください

（リンチェン・ドルマ，前掲書，50頁より引用）

10歳になったリンチェン・ドルマは母ヤンチェン・ドルマがサキャ僧院のサキャ・ラマから守護神として魔女の仮面（魔女(ドウモノ)リキーラ）をもらったため，肉体から魂を抜きとられるように突然亡くなる死の場面に直面する。そして，リンチェン・ドルマは43歳で亡くなった母の遺体検分から葬式の最後まで，とりわけ鳥葬（禿げ鷲）の悲惨さに居合わせ，死の無情さを悟る。すなわち，「遺体解体作業も，実際に目撃してみると恐ろしいショックでした。一般にこうしたことを観察するのは，心の発展に役立つと考えられています。いかに幸せや成功を享受していようと，私たちはいつかは死に，こうした屍になりはてるのです」と（62頁）語る。

リンチェン・ドルマはチョカン(シ)大聖殿の建立にチベット仏教の形成と首都ラサの設立を垣間みて，チベット帝国を築いたソンツェンガムポ王の偉大さを実感する。チョカン(シ)大聖殿と首都ラサは同時併在的に次のように建立される。

チョカン大聖殿は今をさること千三百年前，ソンツェンガムポ王のネパール王妃ベルサによって建立されました。ソンツェンガムポ王より王女を求められた父のネパール王は，仏陀その人から加持を受けたとされる極めて

尊い釈迦牟尼像を持参金の一部としてチベットに持っていくよう命じました（ネパールでは今なおその釈迦牟尼像が安置してあった台座をみることができます)。ベルサは，この釈迦牟尼像を祀るためラサに寺を建立しようと思い立ち，占いに長けたギャサ（ソンツェンガムポ王の中国妃，文成公主）にふさわしい土地を尋ねたところ，ラサの小さな湖の上がいいだろうとの答えがもどってきました。ベルサはこの答えに疑いを抱き，夫である国王に再び相談しました。ソンツェンガムポ王は瞑想の後，ギャサの指定した湖こそ寺の建立にふさわしい土地であるとの裁定をくだしました。この湖を埋め立てるために，夥しい数の山羊が石や土運びに使役されました。そこで，いまだにチョカン大聖殿には，一匹の山羊の像が祀られているのです。チョカン大聖殿は，中国，インド，チベット三国の建築様式を取り入れ，石材と木材を用いて建立された三層の壮麗な建築物で，天井をささえる柱にほどこされた人や動物の彫刻は，ブッダガヤやサルナートの遺跡のなかにみられるものときわめて似通っています。ベルサはおそらくチョカン大聖殿の建立にあたって，何人かのインド人建築家を呼び寄せたのでしょう。しかし，中心になったのはやはりチベット人であったにちがいありません。寺は，大祈願会（モンラム・チェモ）の際に僧侶の集会場になる大ホールと諸仏の像を祀った小さなお堂からなっています。チョカン大聖殿はラサの中心に位置し，その周囲は一・五キロほどの環状路（パル）兼商店街（コル）になっています。貴族の邸宅の多くはこのパルコルに面しており，三階建の邸宅の一階は商店に貸し出されています。

（リンチェン・ドルマ，前掲書，89-90頁より引用）

通説ではソンツェンガムポ王(617-698年)の2人の妃，つまり1人は唐妃文成公主，もう1人はネパール妃ベルサのうち文成公主が中国から仏教を伝え，ショカン僧院を建立したと主張されているが，リンチェン・ドルマはネパール妃ベルサによって持たらされるネパール系仏教にチベット仏教の起源を求める。すなわち，彼女はネパール王妃ベルサがその嫁入り道具の1つである釈迦牟尼像を祀るためショカン大聖殿を建立し，この建築の土砂を羊に運ばせ湿土と砂地を埋めたててラサの建設を行っている経過を明らかにする。

後者の仏教の導入と形成はソンツェンガムポ王と翻訳僧トンミ・サムポータの共同作業に由るものと次のように記す。

その何十年も前からチベットには，『秘密』と呼ばれる誰ひとり読むことのできない経典がありました。その経典はインドよりもたらされたものであり，チベット王トトリは夢のなかで四代後の王がその経典を読みとくであろうとの予言を受けていました。ソンツェンガムポ王がトンミ・サムポータの助けによってこの経典を読みとくことができたとき，チベットにおける仏教の伝播が始まったのです。

トンミ・サムポータの像は常に経典を手にしています。サンスクリット文字からチベット文字を考案したのは彼だったからです。多くの人々が，チベット語と中国語には，なんらかの類似性があると考えていますが，文語にしろ口語にしろ似通った点はほとんどありません。文法はいたく入りくんでおり，文語となるとしばしば凝った言い回しが好まれ，綴りを知らずに重要な手紙を書くのは危険です。

トンミ・サムポータが三十の文字からなるチベット語のアルファベットを考案したとき，どうしても最後の六つの文字が考えだせませんでした。いきづまり，悩んだ彼は，夢のなかで一人の男に助けを求めたのです。夢の男の回答をヒントにサムポータは残りの文字をあみだすことができたのでした。サムポータは今日に至るまで信仰の対象になっており，人々は ── 特に子供たちは像が手にしている経典に手を触れ，ご利益を得，彼のような賢い人になれるようにと祈るのです。

（リンチェン・ドルマ，前掲書，92-93頁より引用）

ダライ・ラマ13世が1933年に亡くなり，次のダライ・ラマ14世は就任するや摂政政治の下に

政教一致体制の維持に努める。リンチェン・ドルマはこうしたチベット仏教界の変動を目の前にしてチベットの平和を祈り，ジクメの果樹園（リンゴ）の栽培に力を注ぎ，日夜仏壇の供物，読経で功徳を積む生活を次のように続ける。

「まもなく林檎園からの年収は 200 英ポンドに達するようになりました。初物はチョ(シ)カン大聖殿とダライ・ラマ法王に献納し，次に友人や親類におすそわけします。収穫の林檎のうち千個は，地下約 1 メートルの砂のなかに埋めて保存し，新年になった時点で掘りだして知人に配りました。人々は紅くつややかな冬の林檎に称賛の声を惜しみませんでした。残りの林檎は売却して利益を得ました。その一部は召使たちに売り，召使たちは買った林檎を転売してかなりの利益を得ていました。ジグメが家庭内の問題に頭を悩ませずにすむように，タリン邸の管理の一切は私がひきうけ，存分に配慮して義理の両親の世話をしました。私たちは普通夜明け（5 時から 6 時）とともに起き，読経をし，仏壇に供物とバター灯明をささげ，線香をともします。」（196 頁より引用）

こうした仏間と仏壇での読経と供物儀式の毎日の勤行はチベット仏教への信仰を深め，チベット仏教の空観を知るため高名なラマ僧の教えを受け，八正道の教え，さらに仏陀の智慧をもっと知ろうと努め始める。リンチェン・ドルマはチベット仏教の空観とカルマの因＝果の関係を次のように関係づける。

「また姪や侍女が子供を生むときにはきまってつきそい，私の手の中で生まれた赤ん坊は，両手の指では数えきれません。とまれ，私がいちばん関心をもっていたのは，仏法を学び，諸存在の本質のなんたるかを知ることにありました。これは簡単に理解できるような代物ではなく，私は邸宅に高名なラマ僧をお招きしては教えをうけていました。

仏陀は，人生の本質を観察し，すべての存在が無常であることを認識して覚りをひらかれました。仏教のどの宗派も，不善を避け，善を行ない，心を浄化せよと説いています。こうした教えは，八正道に基づいています。八正道とは，すなわち ――

一、正見（迷信と煩悩をさけること）
二、正思（人間の知性にふさわしい考えをもつこと）
三、正語（優しく，真実を語ること）
四、正業（清浄で正直な生活をおくること）
五、正命（生きとし生けるものを傷つけたりしないこと）
六、正精進（自己を修め，抑制すること）
七、正念（邪念をはなれること）
八、正定（深い瞑想のなかで真理について考察すること）

仏陀は，この教えを完璧に実践されたかたでした。仏陀の教えに従う者の多くが，仏陀を倣い，宗教的畏敬と悔悟の念を抱いて巡礼の旅に出ます。私たちは，貪り，怒り，愚かしさをなくすために，供物を捧げ，祈るのです。仏教徒ならだれしも，因＝果を信じており，これを信じるがゆえに罪をさけるよう努力するわけです。仏陀の教えにもこうあります。

悪業をなすのは己れ自身
罪で汚れるのも己れ自身
悪をさけるのも己れ自身

浄化するのも己れ自身
他人の罪を清めることは誰にもできない」

(リンチェン・ドルマ，前掲書，201-202頁より引用)

チベット仏教の悟りが8正道にあり，その実践で功徳を積むことがカルマの因＝果を立切り，輪廻転生から極楽＝涅槃へ移ることを意味する。かくて，空観＝無常は功徳の清浄さを動機づける。清浄さの8正道とは次の心がまえ＝道徳心によって真理となる。

1．正見
2．正思
3．正語
4．正業
5．正命
6．正精進
7．正念
8．正定

リンチェン・ドルマはチベット仏教の育くむ人間像を開花した人間（＝利他心）に求め，利己心の人間と対比させ，2つの人間像を次のように想定する。

「幸福を維持するためには，道徳的規範が必要です。人間は宗教なくしては，自分のことのみにかまける，きわめて利己的な人間になりはててしまうおそれがあります。

仏教徒は，人間に生まれることがもっとも望ましいと考えています。いったん人間に生まれたならば，理性と信仰を正しく用いて輪廻から脱し，永遠に涅槃の境地に住することもできるからです。ですから，仏教では自殺を罪悪視しており，人が怒りや恐怖にかられて自ら命を絶ったならば，その後の五百生は人の体に生まれかわれないといいます。もちろん，他人のため，自分の貴い命を犠牲にしたならば，話は別です。

だれもが命を大切に思っています。人であろうと動物であろうと，死ぬのを見るのはいやなものです。そこで仏陀はこうおっしゃっています。「一切の衆生は，幸せをのぞんでいる。汝の哀れみの心を，一切の衆生にもさしのべよ」。チベット人は病気になると当然医者にかかって，しかるべき治療もうけますが，治療が効果をあらわすようにと祈禱や法要を行ないます。チベットには，病人のベルトを，と場にもっていき，それを羊や山羊の群れに投げ，あたった一匹をベルトにつないで家にひいてくるという風習があります。時には市価より高いお金をわざわざ支払って，こうして一匹の動物の命を救ってやるわけです。家ではなくチョカン大聖殿に連れていってそのまま放つこともあります。この場合家畜はチョカン寺に献上されたとみなされ，家畜たちは仏陀の加持のもと，専用の牧草地に入って草を食みます。私も，子供たちが重い病気を患ったときなどよく動物をこうして放してやったものです。寿命がつきて死ぬならまだしも，命が不自然に断たれる，と場にひかれていく動物をみるのはなんとも悲しいものです。動物たちは，これから自分たちにどんな運命が待ち受けているのか承知しているかのようでした。」

(リンチェン・ドルマ，前掲書，203頁より引用)

チベット仏教はカルマの因＝果を受け，輪廻転生から脱するために「他人のため，自分の貴い命を犠牲にする」利他心の開花された人間になることを空観＝無常の中から導かれることを聖な

る清浄と位置づけ，真理とする。他方，「人が怒りや恐怖にかられて自ら命を断つ」利己心の人間は道徳心に欠け，「自分のことのみにかまかける，きわめて利己的な人間」とされる。こうした利他人の人間と利己心の人間を分けるのは「心を訓練する」か，或いはしないかに由るのである。この「心を訓練する」ことによって人間は「精神的発展」を遂げ，「思いやり」の「慈しむ」ことから他人に救いの手を差し，利他心の実践を積む。ここにリンチェン・ドルマはチベット仏教の秘密を利他心に求め，利他心を自己の心の中に芽ばえさせることを心の訓練で体得しえると次のように述べる。

「真実の教えは，ごく小さなエッセンスに凝縮することができます。けれども，これを理解するのはなまやさしいことではなく，それを修行するとなるともっと難しいのです。チベットは仏教国ではありますが，仏教の真の実践は楽なものではなく，そこで，多くの供養をおこない，儀軌にしたがい段階をふんで修行していくわけです。学んでいくうちに人は，自分の心のなかに真理を見出すことができるようになります。大切なのは，心なのです。心を訓練しなければ，なんら精神的発展はのぞめず，また思いやりは知性を培います。人は何事も自分がそうと納得するまでは，本当に信じることはできないものです。」

（リンチェン・ドルマ，前掲書，202 頁より引用）

チベット仏教は「苦行よりも，自己を知ることに，自己抑制に重きをおく」精神訓練を重視し，慈しみの心或いは思いやりの心を育（はぐ）くむ利他心を空観（＝無常）から導く密教を強調する。リンチェン・ドルマは本地垂迹説からボン教をチベット仏教の柱の１つに加える。すなわち，チベット仏教は「世界の烟薫祭」（サムリン・チサン）の精神，つまり「古来のアニミズム宗教ポン教」を取り込み，地域の守護神をチベット仏教の護法尊に転生させる。リンチェン・ドルマはポン教をチベット仏教に取り込むインド高僧パドマサムバヴァ（始祖ニンマ派）の重要性について次のように語る。

世界（サムリン・チサン）の烟薫祭の第一日目には，どの家もたくさん烟薫をたき，祈禱旗をかかげます。こうした習慣は，結婚，誕生，葬式にまつわる数々の風習と同様，仏教とは関係なく，チベット古来のアニミズム宗教ボン教の名残りなのです。

ティソンデツェン王（在位七五五―七九七）に招聘（しょうへい）されてチベットにやってきたインドの聖者パドマサムバヴァは，チベットに仏教をひろめられることを嫌ったボン教の神々から妨害をこうむることになります。しかし，パドマサムバヴァは，自らの強い験力によって反抗的な土着の神々を折伏し，以後仏教の護法尊になるように誓わせました。そんなわけで，もともとはボン教の神々だったものが，ずいぶんチベット仏教の護法尊のなかにまぎれこんでいるのです。烟薫を炷くとか，祈禱旗をはるといったボン教の習慣も同様に残りました。ただし祈禱旗には，仏教の経文が刷られます。風がそれを幾度も数えきれないほど読み上げられるように。」

（リンチェン・ドルマ，前掲書，206 頁より引用）

ポン教の神々，魔女，悪魔はパドマサムバヴァの験力，霊力によって折伏され，仏教の護法尊，守護神になることを誓わされ調伏され，アニミズム精霊の世界である生と死の儀式，つまり冠婚葬祭，誕生，結婚に入り込む「生きとし生けるものの全て」の自然神をチベット仏教の仏に対す

る守護神と見なす。

以上のように，アニミズム宗教ポン教を取り込むチベット仏教は密教とポン教を両輪にすることで人間界，霊界そして自然界の三位一体の構造を支え草の根としての地位を確立する。かくて，人間界の魔除(まよ)けの呪文＝真言（密教）はポン車の中に埋め込まれ，或いは祈禱旗に刷られ，さらに，「世界の烟薫祭」の烟薫を炷く儀式を生み出す。

1946年頃リンチェン・ドルマは長女ツェリン・ヤンゾムの結婚式の後，インドを旅行して戻ってからニンマ派尼ロチェン・リンポチェの教えを受け，将来人生の全てを仏の道一途に修業したい旨，つまり尼僧或いは聖(ひじり)になりたいと告げるが，日常生活の中でも悟れるので山に籠らなくてもよいと次のように告げられる。

> ジグメともども，尼(アニ)ロチェンのもとを訪れ，加持を受け，教えを授けてもらっていたときのことです。私は，自分がいつの皮下，山に籠り，仏の道一途に精進することができるように祈ってほしいと頼みました。すると，尼(アニ)ロチェンは，それはあなたには無理な望みだが，仏法の道を歩むとはすなわち，自分の心を観察することにあると説明してくれました。なぜなら，知覚をコントロールしているのは，心であるから――。「別に自分を人里離れた場所に追いやる必要はありません。いったんそうとわかれば，すべての場所が天国になりかわります。罪障を浄化しつくした，真の意味での宗教的な人は世界中どこにでもいるものです。日常生活で仏の教えを行じるために山に籠る必要はありません。生きとし生けるものに思いやりの心をもって接しなさい。そうすれば，あなたの望むことは必ず成就します」
>
> （リンチェン・ドルマ，前掲書，223頁より引用）

ニンマ派尼ロチェン・リンポチェはこの1946年頃では100歳を超え，始祖パドマサムバヴァの明妃の生まれ変わりであるマチク・ラブドゥンマの転生者と云われ，瞑想三昧の生活を洞窟の中で営み，レティン摂政の訪問を受けていた。その尼ロチェン・リンポチェは日常生活の中で精神訓練を積み重ね，その結果，観音信仰の「慈しみの心」，或いは「思いやりの心」で他人を助け，或いは施しの功徳を行い，開花された人間として解脱する道を説いていた。すなわち，「生きとし生けるものに思いやりの心をもって接しなさい」と。チベットではダライ・ラマ14世の元服まで摂政政治で統治され，前摂政レティンと新摂政タクタの間で対立が深まり，混迷に陥いっていた。ダライ・ラマ14世が16歳になり，1950年11月7日政権に就き，政教一致体制の統治が復活したが，1951年北京に使節団を派遣し，中国との交渉に当たらせ，チベットの独立を政治方針として臨んでいた。しかし，使節団はケメー・ソナム・ワンドゥ（クンサンツェ・ザサー），トゥプテン・テンダーに，さらにケンチェン・トゥプテン・レクムン，サムポ・テンジン・トゥンドゥプ，ンガプー・ンガワン・ジグメを加えて構成されたが，ダライ・ラマ14世の許可を得ないまま1951年5月に中国との間で17条協定を調印し，中国の宗主権を認めてしまった。この後，中国は人民解放軍1万人をラサに進駐させ，中国に亡命したパンチェン・ラマの提案を受け，チベットを中国への自治区に編入すべく内政干渉と内国植民地化を進め，リンチェン・ドルマを苦しみの底へ突き落した。1956年にリンチェン・ドルマは亡くなったチュシュル荘園の差配人の霊に取りつかれ

て衰弱する姉ベマ・ドルカーの姿を見てチベット仏教の空観（＝無常）を次のように再認識する。

「ツァロンはラサより二十キロのチュシュルに小さな荘園を持っていました。このチュシュルから誰かがラサに仕事だか商売にやってくると，きまってベマ・ドルカーにチュシュルの土地神が降りるのです。姉はだれがラサへの途上にあるか知る由もありません。そこでツァロンはチュシュルからやってきた人物の願いをなるべくかなえてやろうとするのでした。さもないとこのチュシュルの神がベマ・ドルカーに重い病をひきおこすからです。この神は，ずっと昔に死んだチュシュルの差配の霊とされていました。チュシュルの荘園はいまだにその差配の家系の者によって管理されていました。チベットでは，自分の家族や一定の場所や品物にあまりにも執着すると，死後も然るべき場所に生まれ変ることはできず，執着したもののまわりを長いことさまようと言います。だからこそ仏教ではすべての物への執着をふりすてるための修行を説くのです。」

（リンチェン・ドルマ，前掲書，288 頁より引用）

チベット仏教が密教として金剛乗を経典にするのは金剛杵で人間の貪欲という神秘な心，つまり執着を破砕することに由来し，人間の執着，貪欲さを捨て去る空観（＝無常）を真理として位置づけている。このチベット仏教は執着する人が亡くなった場合，「死後も然るべき場所に生まれ変わることはできず，執着したもののまわりに長いことさまよう」と見做される。このことから，リンチェン・ドルマは姉ベマ・ドルカに憑く悪霊を執着する人（差配人）の霊と考え，その悪霊を金剛杵で打ち砕くチベット仏教の真理を体験する。

1956 年中国は東チベットのカムパ族の反乱を契機に侵攻を開始し，1957 年カム地方からアムド地方へ拡大すると，1958 年にラサの占領を図り始め，ダライ・ラマ 14 世を含むチベット人を危機に陥し入れる。ダライ・ラマ 14 世のインドへの亡命の後を追うように死を賭けてリンチェン・ドルマもブータンを目ざしてヒマラヤ山脈を命がけで超え，生死をさまよう経験をすることで死への恐怖と同時に死を乗り超える精神力を次のように体験する。

「タシとラブギェーと私は，60 名ほどのカムパ族とともに馬を進めました。残りの兵士は分散していました。ラサはどうなったのだろうか，ジグメはあの恐るべき砲撃の中を生き延びることができるのだろうか。子供たちは，いとしい義母は……。思うことはこればかりでした。ターラー菩薩にご加護をと祈るほかできることはなにもありませんでした。そして中国のこの無慈悲で残虐な仕打ちを踏み台にして，精神的向上をめざさなくてはといくども自分に言いきかせました。ジグメや子供たち，私たちチベット人のように苦しみのさなかにある生きとし生けるものすべてを救済できるような精神的な力を。インドの平原で隠者となり，修行に専念しつつ放浪したらどうかとも思いました。自分はつねに真の仏教徒であったし，覚りへの道は，快ではなく苦を通して得られるものだと自分に言いきかせて，経典にもこうあります。「心が貪りにも怒りにもつき動かされることのない者は，善も悪も捨て去る。このように自らの心を注意深く見守る人に，恐怖は存在しない」と，けれども，毎日こうしたお経を読むうちに絶望の日々にも救いがもたらされるのでした。」（319-322 頁より引用）

ブータンへの逃亡の中で死に直面するリンチェン・ドルマは絶望の淵から這い上る精神訓練による精神的向上で自らの心を見守り続ける中から全ての執着，貪欲を捨て，或いは厭って離れる解脱の空観から「慈しみの心」，或いは「思いやりの心」を強め，悟りを体験する。こうした心の

解脱は恐怖心を捨て去り，死の危機を切り抜ける精神的向上をもたらし，やっとの思いでブータンに着く。

以上のように，リンチェン・ドルマは幾度か死に直面し，或いは家族の死に際し，その都度精神訓練とその向上で「慈しみの心」又は「思いやりの心」の利他心を開花した人間に成長するが，その結果，チベット仏教の空観（＝無常）を体験する。すなわち，リンチェン・ドルマはチベット仏教の密教とポン教の両面を体験してチベットの現代史を生き抜くのであり，まさにチベット仏教の精神を体現する生き方を貫ぬいた「チベットの娘」と位置づけることができるであろう。

2章　チベット仏教7派

チベット仏教が最大宗派の7派を中心にして発展するが，そのうちチベットの国教となったのはゲルク派であり，サキャ派，カギュ派，カダム派，シチェ派，ジョナン派，ニンマ派と続く。チベット仏教はゲルク派，サキャ派，カギュ派，ニンマ派の4大宗派を頂点に形成され，発展を見る。多田等観は1912年から10年間ダライ・ラマ13世の要請でカギュ派セラ寺でチベット仏教を顕教と密教の両面に垣って学び，顕部学卒業のゲシェ学位を授けられ，西本願寺へ復帰する。多田等観はチベット仏教の独自性と4大宗派について明らかにしているが，その説によると以下のように描かれる。

(A)　ニンマ派の教学

始祖はソンツェン・ガムポ王で，講話の観世音真言念誦法を起源とす。開祖はパドマサンヴァで9乗を立て普賢法身説法を無常の秘密乗と位置づける。ニンマ派は一名ゾクチュン派又は紅教とも云われ紅帽子を被(かぶ)るが，妻帯を修道の条件とする。本山はドルジェダ僧院，ミンドルリン寺院である。

(B)　カダム派

始祖はインドのヴィクラマシラー寺高僧アティーシャで，道徳的因果律を説き，三士教の階梯を極めて自己成仏するすることから，因果ラマとも呼ばれる。高弟ドムトンパは始祖の法灯を継ぎ，本山をラデン僧院に建立し，本宗を修道，観法，教法と定める密教を展開し，カギュ派を生み出す。したがって，カダム派はカギュ派に統合される。

(C)　カギュ派

始祖はマルパ・ロツァワで，プトン学説（秘密乗）を継ぎ，インドで学び，さらにナーロ大阿闍梨より秘密乗（金剛乗）を受け，ミラ・レーバに伝える。ここに観音信仰はダライ・ラマの化身系譜としてチベット仏教の中枢を占める。尚阿弥陀如来の転生化身はパンチェ・ラマであり，

観音菩薩に次ぐと云われる。ミラ・レーバの後ダクポ・ラジュの時にカギュ派は次の 9 支派に分立する。

(1) カルマ・カギュ派（Karma bka' brgyud pa）── 俗にカルマ派（Karma pa）という。テュスム・ケンパ（Dus gun mkhyen pa）を祖とす。カルマ・ラデン（Karma lha ldan）寺，ツルプ（Mtshur bu）寺（現存）はその本山なり。
(2) パクドゥ・カギュ派（Phag gru' i bka'brgyud pa）── パクモドゥパ（Phag mo gru pa）を祖とし，デンサティル派（Gdan sa mthil）（現存）に在りて教線を張る。
(3) シャン・ツェル派（Zhang Tshal pa）── ラマ・シャン（Bla ma zhang）の開きし一派にしてグンタン（Gung thang）寺をもって本山とす。
(4) ディグン派（'Bri gung pa）── パクモドゥパの高弟リンチェン・ペル（Rin chen dpal）の創めし一派，ディグンに壮大なる仏殿金塔数基在り，王献掌握時代の霊遺跡として知らる。
(5) ドゥク派（'Brug pa）── ツァンパ・ギャレ（Gtsang pa Rgya ras）を祖とす。ロンドル（Klong rdol）に本山を建つ。
(6) タクルン・カギュ派（Stag lung bka' brgyud）── タクルン・ダムパ（Stag lung dam pa）を祖とし，タクルンの地に壮麗なる仏殿を建造し，内に丈六金銅仏数体を安置す。法灯さかんなり。
(7) バロム・カギュ派（'Bad rom bka' brgyud）── ダルマ・ワンチュク（Dharma dbang phyug）を祖とす。
(8) ヤサン・カギュ派（Gya' bzang bka' brgyud）── エシェ・センゲ（Ye shes seng ge）を祖とす。
(9) トプ・カギュ派（Khro phu bka' brgyud）── リンポチェ・ギャツァ（Rin po che Rgya tsha）を祖とす。十三世紀中葉，この派より碩学プトン・リンチェン・ドゥプ（Bu ston Rin chen grub）出ず。学内外に秀で顕密両業に通暁す。殊に梵文学はその得意とするところにして，古来の経典を整理し評釈を加えたる大蔵経目録を作製す。また密教宗乗の外に律，大般若の研究をも大成せり。シャル（Zha lu）寺に住せるより，後世シャル派とも称し，独立の一派として呼ぶ者あり。

以上九派，別宗を成すものは主として地理あるいは伝灯上の相異より生ぜしものにして教義上大差あるにあらずといえども，修行観法においてそれぞれ特色を有すること論をまたず。例えばカルマ派は己身と本尊の不即不離なる観法を高調し，パクモドゥ派は真言陀羅尼，明呪等に重きを置き，ディグン派は小乗戒，菩提戒，秘密戒の三戒の融合による一種の平等戒を主張し，またドゥク派は十二因縁説を用いて秘密教乗を取り扱うなどのごとし。

（多田等観，前掲書，122-123 頁より引用）

カギュ派支派ドゥク派が次に取りあげるブータン仏教のドゥク派にあたる。

(D) サキャ派

始祖はコン・コンチョク・ギュルポで，秘密新派の観行を生み，本山をサカルウ（サキャ）僧院とする。曽孫クンガ・ギェルツェンはインドで学び，元朝より灌頂阿闍梨として招かれる。さらに，その子チョギュル・バクパは密業を修し，元朝フビライ汗の帝師に就き，21 歳でフビライ汗からチベットの支配権を献じられ，チベットの統一王朝サキャ朝を創(はじ)め，カギュ派と政権争奪を行うチベット仏教界の雄となる。

(E)　ゲルク派

始祖はツォンカパ，又の名はロプサン･タクパで，カダム派を中心にしてニンマ派，カギュ派，サキャ派の長所を取り入れてゲルク派を興し，新派と呼ばれ，一名ガンデン派又は黄帽派ともいわれる。ツォンカパは密教と顕教の総合化を図り，持戒（顕教）と般若乗・秘密金剛乗，さらにアティーシャの教義（カダム派）の融合統一に務め，本山ガンデン僧院を建立し，弟子ダルマ・リンチェンに黄帽を授けて継がせる。ダルマ・リンチェンはガンデン・ティパ（大阿闍梨師）となり，化身系譜で受け継がれる。さらに，この化転生系譜はゲルク派の中にダライ・ラマとパンチョ･ラマの２つを生み，共生と対立を深める。観音菩薩の化身系譜はツォンカパの弟子ゲンデュン・トゥプをダライ・ラマ１世とする。１世の化身転生者はゲンデュン・ギャムツォをダライ・ラマ２世とする。ダライ・ラマ５世（ロプサン・ギャムツォ）は東チベット青海地方のモンゴル族長ゲシ汗よりチベットの支配権を授けられ，ダライ･ラマ王朝を創出して政教一致体制でチベットを統治する。ダライ･ラマ14世が中国のラサ占領によりインドに亡命したことは第一編で述べたところである。他方，阿弥陀如来の化身系譜はパンチョ・ラマを生み出し，現代中国の保護の下にチベットに深く懸(かか)わっている。

多田等観はゲルク派の教学を次のように概括する。

「ゲルク派の教学 ── 教義上，また実践修道上に顕密二教をきわめて均等に配説す。まず顕教にてアティーシャの三士教を踏襲し，しかも諸経論を引証して内容の充実を図る。大士教（Skyes bu chen po’i lam）の発菩提心を説明するうえにおいても七階の観法次第りと説く。すなわち⑴一切衆生は吾が母なりと観ず。⑵これにより衆生恩の宏大なるを憶う。⑶吾この恩に報いんとの勇猛心を起す。⑷怨親平等観に立って一切衆生を哀愍す。⑸これらの衆生を苦悩より脱せしめんとする慈悲心を生ず。⑹平等に一切を救わんと決す。⑺上求菩提下化衆生の大道に趣向せしめんと欲す。これ希有最勝心すなわち発菩提心なりとす。以上の七階の外にまた自他の苦楽を交替するの法によりて菩提心を発起するの道あり。けだし自己の安楽を一切衆生に与え，一切衆生の苦悩をことごとく自己の上に代受せんとする犠牲的精神なり。これらの大菩提心の修養錬成は，戒律と般若の空観とともにこの派の教学の三大要素にして顕密修道の根底となす。また密教の内容を分かちて四密を明かす。⑴儀密（Bya rgyud）は一切儀軌作法を総括せしものなり。⑵行密（Spyod rgyud）は印契等の修法行作をいい，⑶瑜伽密（Rnal ’byor rgyud）は行法智慧相応の理教にして，⑷無上瑜伽（Rnal ’byor bla med rgyud）は大楽（bde chen），大智（shes rab），相応円融，究竟密乗の奥義なり。また修法には生起次第（Skyed rim），究竟次第（Rdzogs rim）の二つあり。生起次第とは密戒を受持し，灌頂を受け，講伝を経るを必須の条件とす。加行としては金剛杵，金剛鈴の加持，内供養物の加持法，以身供養物，金剛薩埵念誦法等なり。資糧としては曼荼羅供養，除魔としては護身法等を修し，しかして後行者所生の浄土たる曼荼羅を建立し，本尊と己身との不離一体を観じての法楽を味わい，印契等の行作を行いて内証外作不離一如の観法に入る。究竟次第にはこれに，⑴生理的作用，⑵心理的作用，⑶身心融合の作用の三段ありて深き三昧定に入り，生理的なる呼吸調節の観法により入我我入の境地に入り，もって精神的なる楽地を得，その大楽たるや一面般若の空観と相応じて円融無碍自在に到達し，智慧方便不離不即の大三昧定を得，この禅定において所知障網の一切を破するの刹那即身成仏す。成仏に先立ち，他派にて談ずるがごとき媾合を必要とせざるのみならず，むしろこれを非法と貶(へん)す。もし今生において成仏し能わざる者も，臨終に大禅定に入らば来世必ず成仏すという。これ無上瑜伽の妙法にして究竟最勝の法門なりとす。本宗密教業における本尊は一ならずといえども，主として開祖ツォンカパの本尊たる大威徳明王(だいいとくみょうおう)（Rdo rje ’jigs byed，サンスクリット語 Yamāntaka）を尊崇供養し，その観法を修するを常とす。」

（多田等観，前掲書，129-130 頁より引用）

3 章　ブータン仏教とドルジェ・ワンモ

リンチェン・ドルマは 1958 年インドへダライ・ラマ 14 世の後を追って亡命する際，途中ブータン国境でカギュ派支派カルマ派管長ギャルワ・カルマパに会い，逃亡を同行するが，ブータン仏教ドゥモ派の系譜をチベット仏教カギュ派に次のように求める。

「ギャルワ･カルマパはカギュー派の一分派であるカルマ派の管長です。シッキムやブータンには，カギュー派の信者が多いので，ギャルワ･カルマパはたいそう尊敬されていました。彼は，あるカムパの家の出で，ダライ･ラマ法の次の階位を保持し，サキャ・ラマ（サキャ派の長）と同位の扱いをうけています。亡命後ギャルワ・カルマパとその弟子たちは，シッキムに僧院を建立し，現在そこに住み，定期的にブータンを訪問しています。」(335 頁)

4 代国王ジクメ・センゲ・ワンチェックの妃であるドルジェ・ワンモは「ブータンの娘」として『幸福大国ブータン』を書き，ブータン仏教ドゥク派の密教とポン教の両輪について既に第二編でその体験を通して描いた。ここでは，第二編を前提にしてブータン仏教を概括し，ブータン仏教で育くまれる人間像を探究することにある。

チベットのリンチェン・ドルマはチベット仏教で生み出される人間像を観音信仰を草の根にして精神的向上を計る「慈しみの心」或いは「思いやりの心」を有する「利他心の人間」を開花された人間像として位置づけ，「自己心の人間」と対比させ，2 つの人間像を類型化した。他方，ブータン仏教の人間像を類型化するドルジェ・ワンモは現代における「幸福大国ブータン」を支える人間を「開花された人間」として位置づけ，GNH（国民総幸福）を担う人間として見なす。

以上見たように，チベット仏教とブータン仏教が同じ大乗仏教系カギュ派（＝ドゥク派）に属している。この宗教の相同性は 2 つの人間像，つまり利他心の開花された人間と自己心の執着する人間との 2 つの人間像に類型化することができる。チベット研究者である今枝由郎はブータン仏教がチベット仏教の延長線上に形成されている点について次のように記す。

「17 世紀前半に，チベット系大乗仏教の一派であるカギュ派の化身高層によって国として統一されてから，カギュ派を国教とし，その歴代化身系譜を聖俗両面での最高権威者･権力者とする，いってみれば「神権ならぬ「仏権」政治体制が続いた。そして 1907 年からは世襲王制となったが，仏教が国教であることには変わりなく，現在でも国民の大半は信心深い仏教徒であり，ブータンはチベット系仏教最後の砦ともいえる。」

（ドルジェ・ワンモ，『幸福大国ブータン』，16 頁より引用）

今枝由郎はブータン仏教が「チベット系仏教最後の砦」としてチベット系仏教の延長線上に位置づけているが，この相同性については，既にリンチェン･ドルマの言及しているところでもあっ

た。

ドルジェ・ワンモはブータン仏教を「金剛乗とよばれる高度に密教化した仏教」(225頁）と位置づけ，精神訓練で「心の覚醒を目指し，全人格的な発達を遂げた個人」を「開花された人間」として育(はぐ)くまれると次のように記す。

「仏教は，わたしたち一人一人が，心の覚醒を目指し，全人格的な発展を遂げた個人となることによって，共同の未来を築き上げるのに，多くの有益な価値観と方法を提供してくれるものと確信しております。」

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，224頁より引用）

宗教が人間の育成に果たす役割は大きく，自己の心を観察し，その心の訓練で精神的向上を図り，無知の闇から救いの智慧，つまり「慈しみ」或いは「思いやり」の心で他者を救い，助ける人間（全人格的な発展）を生み出す。大乗仏教はこうした「心の覚醒」の空観（＝無常）を真理として位置づけ，利他心による善行を積み重ね，大きな車に乗って安心立命の悟り（＝解脱）をえる宗教と云えよう。

ブータン仏教は前史と3段階との4つに区分される。すなわち，前史はチベット帝国を築いた皇帝ソンツェン・ガムポによるブータンの統治時代である。ガムポ王が遊牧騎馬王朝を中央アジアに樹立し，唐・ウイグル王国との三会盟を組織したことは前に述べたところである。ガムポ王が唐妃とネパール妃の仏教を奨励するため，ショガン大聖殿を建立するが，ブータンにも各地に僧院・寺院を建て仏教を伝来したことについて次のように記す。

おそらくグル・リンポチェに先立つこと一世紀以上前，すなわち七世紀前半に，チベット皇帝ソンツェン・ガムポ〔六四九／六五〇年没〕によってブータンにはいくつかの仏寺が建立されたと思われます。ソンツェン・ガムポ王の時代に建立されたとみなされる仏寺のうち，中央ブータンのブムタンのジャンペ・ラカン，西ブータンのパロのキチュ・ラカン，同じく西ブータンのハのラカン・ナクポとラカン・カルポの四つは現存しており，七世紀の生きた遺産です。

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，228頁より引用）

以上の前史を受け，さらにブータン仏教の第1段階はグル・リンポチェ（パドマサンバヴァ）の仏教をブータンに導入し，第2段階はツァンパを始祖とするチベット仏教ゲルク派のブータン仏教ドゥク派への移行である。そして，第3段階はドゥク派高僧シャプドゥン・ンガワン・ナムギェルの化身転生と政教一致体制の形成である。

第1段階　グル・リンポチェ（パドマサムバヴァ）の仏教伝来

ドルジェ・ワンモはこの第一段階でのグル・リンポチェがブータン仏教として密教を導入することについて次のように記す。

「ブータンの場合，仏教伝来以前というのは，一般に八世紀以前を意味します。八世紀にグル・リンポチェ，すなわち「貴い師」として知られる密教行者パドマサンバヴァが，当時のインド，現在ではパキスタンのスワットと呼ばれる地域からブータンに到り，仏教を導入しました。グル・リンポチェは，ブータンも含めたヒマラヤ地域一帯で，「第二の仏」として崇められる高僧です。仏教は，おおまかに顕教と密教に二分されますが，グル・リンポチェが伝えた仏教は，「お経」に基づいたいわゆる顕教ではなく，タントラあるいはマントラ〔真言〕とよばれる仏典に説かれるいわゆる密教です。その後数世紀の間に，ブータンではさまざまな密教宗派が広まりました。」

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，227 頁より引用）

グル・リンポチェ，つまり，パドマサンバヴァは「タントラあるいはマントラ（真言）とよばれる仏典に説かれているいわゆる密教」を導入し，さらにポン教をも加え，地方神の魔女，悪霊を験力，霊力で調伏してブータン仏教の守護神に変える。これはブータン仏教の本地垂迹説である。このことから，パドマサンバヴァは「貴い師」或いは「第二の仏」と呼ばれ，僧院・寺院に祭られている。

第 2 段階　ツアンパのドゥク派創立

ドルジェ・ワンモはブータン仏教をチベット仏教ゲルク派始祖ツァンパ・ギャレ・エシュ・ドルジェ（1161-1211）の教えに求め，ブータンでドゥク派（雷龍）と云われる由来を明らかにする。ツァンパが僧院の落成式に臨んでいる時に，大きな雷が四方に稲妻を放ちながら鳴り響き，仏教の伝播への兆しと受けとめられてドゥク（雷龍）と呼んだ。ブータンが「ドゥク・ユル」と呼称されるのはこうした雷龍伝説に結びつけられているが，今日では「ドゥク派の国」又は「雷龍の国」と位置づけられている。

第 3 段階　シャプドゥン・ンガワン・ナムギェルの化身系譜

シャプドゥンの化身系譜を引くドルジェ家と国王世襲家ワンチュク家との対立と和解がブータンの近現代を特徴づけたことについては既に第二編で詳述したところでもある。

チベットのダライ・ラマ法王の政教一致体制が機能する理由はダライ・ラマの化身系譜（観音菩薩）に多くを負うているのである。ブータンでもダライ・ラマの化身系譜と相同するのがシャプドゥンの化身系譜である。このことがブータンにおいて政教一致体制の統治構造を形成する原因となる。ドルジェ・ワンモはブータンの政教一致体制とシャプドゥンの化身系譜の関係について次のように描く。

そして十七世紀前半に，そのうちの一つだるドゥク派の高僧シャプドゥン・ンガワン・ナムギェルにより国として統一され，ドゥク派が国教として制度化されました。それ以来，ブータンの政治理念は，仏教の菩薩の概念と，インドのアショカ王のようなチャクラヴァルティンすなわち「法輪王」とよばれる世界皇帝の概念に導かれています。それは，永遠の真理である仏の教えに基づき，生きとし生けるものを苦痛と苦悩から解放するための，肉体的・精神的条件を実現することを究極目的としています。

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，227 頁より引用）

しかし，2008 年に憲法が制定され，ブータンは君主制から立憲君主制へ移行し，政治を政党の

議院内閣制へ移して政教分離を進め，民主主義へ転換する。そして，ブータン仏教は国教として維持され，僧院・寺院2,000余りを通して国民の仏門，仏壇と絆を深め，朝夕の勤行，読経，供用儀式を通して国民の精神を訓練し，精神的向上によって分別のある，或いは身の丈の生活をする「開花された人間」の育成に取り組む。ドルジェ・ワンモは現代ブータンの「幸福大国」を築く担い手としてブータン仏教の観音信仰に包まれる人間の育成を政教分離後のブータン仏教の任務として次のように期待する。

「現在起草中ですが，自由で民主的な憲法は，政教分離体制を築き上げます。この政府と宗教権力との分離ということは，ヨーロッパの歴史に固有な特徴ですが，これがはたして全世界に適用できるかどうかはわかりません。しかし，ブータンでも，仏教および仏教権威は，かつてとは違い，政府に直接かつ制度的に影響をおよぼすことはありません。この先お話ししますが，仏教儀式や僧職者を政府から分離することと，倫理面の分析者・監視者としての仏教を近代化という過程から分離することは，まったく異なるものです。」

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，229頁より引用）

現代ブータンが直面する「幸福大国」の建設の担い手は人口の75パーセントを占める農業人口である。これら農家の人々は代々家に伝わるブータン仏教を生まれた時から空気のように吸い込んで成長する「生まれながらの仏教徒である」。そして農業人口の75パーセントはこれまで以上に仏間，仏壇での精神訓練による道徳心の向上と自律化を強め，物の豊かさとの調整と均衡を計ることを要請されていると次のように記される。

「おおまかに見積もって，ブータン人の七五パーセントは，生まれながらの仏教徒です。残りの二五パーセントの大半は，南部に住み，ネパール語を話すヒンドゥー教徒です。一般のブータン人にとって，仏教徒であるということは，ある特定の行動様式を持ち，生活を支配するある一連の事柄を信じるということです。」

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，230頁より引用）

ドルジェ・ワンモは「生まれながらの仏教徒」の行動を善の功徳を積み重ね続け，開花された人間に成長すると見なす。なぜなら，善の功徳への実践行動はカルマの法則と輪廻観から解脱する唯一の方法となるからである。すなわち，チベット仏教での化身系譜と転生観はカルマの法則の因＝果を切断し，その結果涅槃に達することで転生の縁起（連鎖）を終焉することのできる宗教倫理である。このチベット仏教の空観はカルマの法則と輪廻転生観を育くみ，ここから解脱する利他心を「慈しみの心」或いは「思いやりの心」として生み，観音信仰を形成する。この空観は，ダライ・ラマの化身転生を密教の真理と見なす。同様にブータン仏教も空観への悟りから善の功徳を積み重さね，カルマの因と果，さらに輪廻転生からの解脱を図る「開花された人間」を生みだすと次のように描かれる。

「一般のブータン人仏教徒は，現在および未来を決定するのは自らの業〔カルマ〕であると信じており，これが

もっとも特徴的なことでしょう。言い換えると，在家の仏教徒は，自らの行いの一つ一つには道徳的な結果・責任が伴い，それが今生（こんじょう）から来世に輪廻する自分の意識に影響をおよぼすと信じています。この意味で，輪廻とは自らの行いの結果としての道徳的アイデンティティの連続です。各人は，自らの自由意志による行いによって，自らの来世での生まれを決定することになります。苦しみから解放され，智慧に向かって前進できるかどうかは，各人の行い次第です。」

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，230-231 頁より引用）

ブータン人がブータン仏教の勤行と法要で仏教徒になることはこの世を空観と捕え，その無常なカルマの因と果を断ち，来世の涅槃に達すべく善の行為を積み重ねる観音の「慈しみの心」を育くむことである。こうした観音信仰が仏教徒の心に草の根として根づくのは後生の涅槃に達すべくこの世での空観（＝無常）を悟り，「慈しみの心」でカルマの因と果を切断し，さらに輪廻転生の苦しみから解脱する智慧（真理）を得ることを意味する。

したがって，ドルジェ・ワンモは仏教人の理想をブータン仏教の理念に重ね合わせ，この世の無常さ，空観を真理として捕え，そこから解脱するのにカルマの因と果，或いは輪廻転生への智慧（慈しみの心）と十善を勤行，法要で得るべきであると次のように述べる。

「行いと言いましたが，もっとも重要な行いは心がけです。なぜなら，心がけこそが他のすべての行いを決定するからです。在家仏教徒は，十善すなわち十の善い行いを心がけ，十悪すなわち十の悪い行いを慎もうと心がけます。人間の行いは，身（しん）・口（く）・意（い），すなわち，身体的，言語的そして意識的領域の行いに三分されます。一般的には十悪を行わないということが，十善と考えられています。しかし，よく考えてみますと，十善とはただ単に十悪を行わないというだけではなく，さらに能動的，積極的に善い行いをすることでなくてはなりません。たとえば，ただ単に人を中傷しないという行いは，善業（ぜんごう）には違いありませんが，憎しみをなくし平和を築くという善業とは非常に異なったものです。同様に，いかなる生き物の命も奪わないということは，善い行いではありますが，積極的に命を救うこととは異質なものです。」

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，230-231 頁より引用）

仏教は勤行，法要で空観，無常を悟り，十善の徳を実践し，この世をよりよく改善して生きとし生けるものの命を大切にする価値観を育くむべく機能する。

ドルジェ・ワンモはこうした生きものを「慈くしむ」価値観を持つ人間を開花した人間として把握し，生きとし生けるものの生態循還を「縁起」の関係と見なし，その相互関連に関する智慧に目覚めていくことを次のように告げる。

「いかなる生き物の命も奪わないということは，仏教の根本的な教えですが，それを遵守することはきわめて難しいものです。人間であれ，他の生き物であれ，その命を自らの手で奪わないということは，それほど難しくないかもしれません。しかし，結果的には他の生き物の命を傷つけたり奪ったりすることにつながる一連の連鎖的活動に，部分的にせよ関与しないということは，とても難しいことです。ここで思い起こしていただきたいのは，一つの事柄は連鎖的に他の事柄を引き起こすという，いわゆる「縁起（えんぎ）」の概念です。この仏教思想のもっとも中心的な観点からしますと，わたしたちは自分勝手に決めた物事の境界や範疇といったものを越えて，全体的な物事の相互関連性を見極めねばなりません。

積極的に他人の生活境遇の改善に従事することを心がけることなく，ただ単に善業を積み，徳を積むだけでは，自分の境遇を良くすることはできません。つまり，個人および個人の行いは，必然的に他の人間および生き物に影響をおよぼす相互関連の一部です。これが「縁起」の意味するところです。わたしたちはこの万物の相互関連性から逃れることはできないのです。わたしたちに与えられた唯一の選択肢は，この相互関連性を良い方向に向けるか，悪い方向に向けるかということです。一方で，人間と他の生き物との関係がますます緊密化し，他方で国という単位を超えて，世界全体が地球規模でますます一体化しつつある現在，あらゆる物事の相互関連性を理解し認識することは，今まで以上に重要なことです。」

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，231-233頁より引用）

ブータン仏教が現代においてその役割を果たしている根本的な点はこの世の無常，空観から慈しみの心で徳＝善を積み，他人を救い或いは助けを通して社会の生活境遇の改善に貢献する役割にある。

ドルジェ・ワンモはブータン仏教国の拡大再生産を在家信者と僧侶の相互扶助（分業と協業）を支える「慈しみの心」に求める。すなわち，一方在家信者は寄付，献金，金銭の施し，他方僧侶が修業で功徳を積み，その功徳を勤行，法要で返す相互交換が成立することになる。このことは生殺の職に就く在家信者の悪業を施(ほどこ)しで軽減することができるようになり，さらにその施(ほどこ)しで苦しんでいる人を輪廻から解放してやることになり，社会全体の改善と向上を持たらす。ブータン仏教国がこうした仏教徒の智慧と施(ほどこ)しで社会の生活境遇を改善することはブータンを「幸福大国」へ導く草の根となり，その支点となる「廻向(えこう)」によって維持される。すなわちブータンの仏教国の構造は仏教徒の施こしと「廻向(えこう)」で拡大再生産される道徳感情論の実践知によって自律的に発達することになるが，このことは次のように描かれる。

ブータンが心がけているのは，仏教に深く根ざしたブータン文化に立脚した社会福祉，優先順位，目的に適(かな)った近代化の方向を見いだすことです。最近になってGross National Happinessすなわち「国民総幸福」という指針が各国でも真剣に取り上げられるようになりましたが，これはすでに二十年以上も前に現ブータン国王（第四代国王，在位一九七二―二〇〇六）が提唱したものです。Gross National Happinessすなわち「国民総幸福」は仏教的人生観に裏打ちされたもので，わたしたちが新しい社会改革，開発を考える上での指針です。一部の人々は，仏教をはじめとする哲学的考察と，政治，経済は，異なった次元のものだと考えていますが，けっしてそうではなく，すべてが統合され，総合的に考慮されるべきものです。

今日もっとも重要な課題は，西洋的政治・経済の理論と仏教的洞察との溝を埋めることです。仏教の活力と仏教社会の将来は，仏教の理想をどのようにして社会の進むべき方向，あるいは取るべき選択に肯定的に反映することができるか否かにかかっています。

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，244-245頁より引用）

ドルジェ・ワンモはブータンの「幸福大国」を仏教国の新しい近代化理論のモデルとして強調する。ブータンの「幸福大国」はこうした仏教徒の開花された人間の慈しみの心，或いは施しの実践知で築かれる。ドルジェ・ワンモは「幸福大国」が2つの人間像の共生と均衡で形成されることを重要視する。すなわち，「幸福大国」は「本当に開花した人間」の仏教的人生観（観音信仰）

を実践する中で築かれ，その中での「西洋的政治・経済」の成長観と「仏教的洞察」との溝を埋める，つまり，物の豊かな生活（GNP）と精神の豊かな生活との均衡点を保ちつつ，その拡大再生産を未来社会においても持続化しえると見なす。以上のように，ドルジェ・ワンモは未来社会への展望は西洋的政治・経済の成長観と仏教の理想との間の対立というよりむしろその均衡を探る智慧にかかっていると次のように記す。

農民であれ商人であれ，在家の一般仏教徒にとって，日々の世俗的必要性に直面しながら，仏教の教えを厳密に守って生きることは，ブータンに限らず他の国でも，不可能ではないにしても，多くの問題をはらんでいます。たとえば，食肉産業がどういうものであるかを理解した上で，消費者として肉を食べるとしたら，その消費者はどうして他の生き物の命を奪うという行為に関与していない，といえるでしょうか。それでも，全体的に見れば，ブータンでは命を大切にするという態度が一般的です。ブータンでは鹿，猪，熊，猿といった野生動物が到るところで見境なく作物を荒らしますが，農民はそうした野生動物を銃で退治することを躊躇しますし，殺虫剤を用いることにも抵抗を覚えます。かれらは，野生動物に発砲したり射殺したりするよりは，大声で叫んで追い返し，収穫時期になると森に囲まれた畑の夜番をします。しかしながら，究極のところ農民は僧侶ではありません。ですから，ブータン人は肉を食べますし，一般の農民は気乗りがしないとはいえ，場合によっては村全体で，決まった時節にヤクや牛を屠畜します。

仏教徒として仏の教えを厳密に守れないという問題は，ブータンも含めた多くの仏教国では，在家信者と僧侶との間の二方向性の交換によって解決されてきました。片や，在家信者は，僧伽（そうぎゃ）に金銭または物品を施し，片や，僧伽は，自らを支えてくれる在家信者あるいは社会のために功徳を積むことを，おのおのの役割の一つとしています。この仕組みにより，本来自己責任性の上に立脚した仏教の業の理論は，より柔軟に解釈されるようになりました。その結果，人は悪業を犯しても，他の功徳で補うことにより，その結果を軽減することができる，ということになりました。こうして信者は，僧伽への布施も含め正しい目的に貢献することにより，自らの社会的・経済的地位あるいは役職上，不可避的に犯さざるを得ない殺生などの悪業の結果を軽減することができるようになりました。さらには，大乗的変容により，物品の贈与，布施，祈願といった善業により得られる功徳を，自らのためではなく，他の苦しんでいる人々を輪廻から解放するために振り向ける，すなわち「廻向（えこう）」することが可能になりました。

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，233-234 頁より引用）

世界の中でブータンが「幸福大国」を最も早く発達することができたのは「仏教の業（ごう）の理論」と「廻向（えこう）」との交換によって拡大再生産されるからである。したがって，ブータンの「幸福大国」はこうした交換の社会的機構に支えられる仏教徒の信仰の力，つまり技術・経済中心主義（GNP の世界）での物の豊かさより観音信仰の実践による精神的豊かさに幸福を感じる「開花された人間」の国の表れであるからである。こうした観音信仰に喜（よろ）こびと幸せとに浸る同じような風景はチベット国民のダライ・ラマに寄せる崇拝の中に見出されることが多田等観によって次のように描かれる。

「私がある時，ほこりまみれになって働いているおばあさんに「今後生まれる時は，もっといい国に生まれたら」というと「これで満足だ」といっていた。それは今世において観音様から課せられたことをしてしまわねば，来世にまたこういう苦しみに遭わねばならない。だから罪のあがないのために少しばかりの苦はなんでもないと考えるのである。この点，チベットは政教一致の国である。下級階級は惨めな生活をしている。しかし彼らはそれ

が幸せで，観音様に救われる国に生まれたことを喜んで生活している。

ところで，観音様は，どういうことで国民を惹きつけているか，というと，三世の諸仏菩薩にいろいろな特徴をもっているが，観音様は慈悲によって人々を惹きつけている。それは羊を幸福にする羊飼いのような慈悲である。そういう観音様の慈悲に惹かれているのがチベットの人たちである。そういうものがチベットの仏教の根底に流れている」

(多田等観，前掲書，234頁より引用)

チベット仏教の観音信仰はやはりブータン仏教の観音信仰に引き継がれている。チベットの惨めな生活をしている下級階級は来世の幸せを願って現世での罪（カルマの因と果）のあがないのための苦を何とも感じず，むしろ観音の慈悲として悟り，その「慈しみの心」に満足と幸福を感じるのである。

観音の慈悲が人々を幸福にする価値観は仏教徒の空観，無常観を施しと廻向への功徳に振り向ける力となり，社会の生活境遇の改善，つまり「幸福大国」を生み出す推進力となる。それゆえ，ドルジェ・ワンモは観音信仰の価値観を智慧と位置づけ，仏教の三身（法身，報身，応身（化身））のうち菩薩の化身の重要さを次のように明らかにする。

「ブータン人は，仏の教えを実践し，功徳を積み，それを「廻向」することを心がけますが，その手本となるのが菩薩です。菩薩とは，すでに悟りに到達した人ですが，苦しみに満ちた世俗的生活条件のさなかでさまよっている一般民衆のために働く人です。仏教の中心には，四諦すなわち四つの崇高な真理があります。その第一番目が，苦諦とよばれる真理です。この観点からすると，人間も含めた生き物という存在は，自らの心の本性は智慧であるという悟りに達するまでは，ストレスが多く，問題をはらんだ，苦しいものであると認識されます。とりわけ人間という存在は，苦しみに満ち，ストレスの多いものです。それは物事が絶え間なく変遷する無常の小宇宙であり，わたしたちはその中にあって苦しみとストレスから身を守るために懸命に努力しています。

仏教ではまた，輪廻の存在を六〔あるいは五〕種類の境遇すなわち「六〔五〕趣」に分類します。さらに大乗仏教では，仏にも三種類のカテゴリー，すなわち法身，報身，応身〔化身〕の三身を認めており，衆生を苦しみから救う存在である菩薩という概念は，ここから生まれています。三身のうちの化身 ── ゾンカ語ではトゥルク ── は，大まかにいって，この世界に何度も生まれ変わり，出現する菩薩に同定されます。こうした菩薩は，自らの意志で，この世俗的境遇いわゆる「娑婆」に出現し，わたしたちの中にあって，わたしたちが覚醒した智慧に到る道を見いだすのを助けてくれます。ブータンでは，こうした菩薩すなわちトゥルクの出現が連綿と続いていて，毎年四人から五人の子どもが高僧の生まれ変わりと認定されます。一般にこうした子どもは，亡くなった高僧の前世における行いや出来事を記憶していて，それによってその高僧の生まれ変わりであると認知されます。仏教の教えおよび知識の伝授，僧伽の維持，宗教的系譜の継続という観点から，こうした化身すなわちトゥルクは重要な役割を果たした，とわたしは信じています。」

(ドルジェ・ワンモ，前掲書，235-236頁より引用)

菩薩の化身信仰がチベットのダライ・ラマによる政教一致体制を生み出し，他方ブータンでは「幸福大国」を担う仏教徒の智慧となってブータンの発達を支えている。とするなら，こうした菩薩の観音信仰は仏間と仏壇の朝夕の法要と勤行による精神訓練から体得されるのであろうか。この問に対する答えは心の中に観音を観想するべく心の訓練を積むことにある。すなわち，ドルジェ・ワンモはこの問に対して「四無量心」の空観を智慧の源泉として次のように位置づける。

「仏教では，わたしたちが幸せで健全な社会生活を送るためには「四無量心」すなわち四つの無限の心，
第一に人に楽を与える慈無量心，
第二に人の苦しみをなくす悲無量心，
第三に人の喜びを自分の喜びとして喜ぶ喜無量心，
そして最後に恨みを捨てる捨無量心，
この四つが必要であると教えています。現在進行中の近代化は，こうした仏教の理念に即した社会を実現する可能性を根底から覆すものなのではないのかと，自問せざるをえません。わたしたちブータン人は，本当の意味で開花した人間および社会を実現する，別な近代化の道があるのではないかと模索しています。本当に開花した人間とは，単に開発の主人公としての人間とは別物です。」

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，243-244 頁より引用）

ドルジェ・ワンモが重要視する「四無量心」は大乗仏教が金剛乗の密教であることに深く懸（かか）わり，空観の真言を云い表わしている。多田等観は大乗仏教の顕教を波羅密多乗と呼び，密教を金剛乗と名づける。金剛乗は金剛薩埵の教えであり，金剛とは智慧の意味である。したがって，金剛薩埵は智慧の権化，その人格化である。ドルジェ・ワンモが問題にする「四無量心」とは宝生戒の施しをする心を指す。すなわち，小乗仏教が消極的な止悪を目標にするのに対し，大乗仏教は積極的善性を目標に掲げ，作業善の 14 種と 10 善を密教の真理＝真言とする。作業善の 14 種は次のような 5 仏姓に由来する。

⑴　大日の仏性 ── 仏・法・僧の三宝
⑵　阿閦（あしゅく）の仏性 ── 金剛杵・金剛鈴の印契・金剛阿闍梨耶（ラマ）
⑶　宝生（ほうしょう）の仏性 ── 財施・無畏施・法施・悲施の 4 施
⑷　無量寿の仏性 ── 三乗（声聞・縁覚・菩薩）の聖法
⑸　不空成就の仏性 ── 諸仏菩薩の供養

以上に掲げた 5 仏性は計 14 種の三摩耶（みまや）（誓願）の衆徴であり，その成就を作善門とし，積極的善性の対象とする。密教はこれら 5 仏性の三摩耶を菩提心として捕え，それぞれの仏性の願いを実践することを善とする。すなわち，密教は 5 仏性を有する人間を現世で成仏する即身生仏（そくしんじょうぶつ）と見なし，その即身生仏を唱くのであり，ここに現世利益主義の宗教たる由縁となる。

次に十善を取り上げるが，密教の十善は「金剛乗の結果を目標」としている。すなわち，十善とは身・口・意業の 10 種類のことであり，つまり，不殺生・偸盗・不邪淫（身業の 3），不妄語・不両舌・不悪口・不綺語（口業の 4），そして不貪欲・不瞋恚（しんい）・不邪見（意業の 3）等である。

三摩耶（本願）の義と同様に三摩耶の戒（止悪修善）は次のように 5 仏性毎に相違する。

1　大日戒 ── 戒学（止悪）・摂善法・有情利多門の 3 戒
2　阿閦戒 ── 智慧（如来の絶対性）
3　宝生戒 ── 財施・法施（説法）・無畏施・悲施の 4 布施
4　無量寿戒 ── 聖者の法＝仏法
5　不空成就戒 ── 供養所作（外（華・香・燈・塗・飯食）・秘密（種子供用）・真性（四歓喜）

「四無量心」は「戒」に属し，３宝生戒に於て扱われ，無畏施と悲施にまたがり，怨親平等観に立った布施となる。「怒の心を捨て慈・悲・喜・捨の四無量心に住する施を行ずる」(157頁）と，多田等観は解釈する。

ドルジェ・ワンモは「四無量心」を大乗仏教の金剛乗における智慧（菩提心）の絶対界の真理と位置づけ，現実界＝俗界の官能主義･愛欲と対比させる。すなわち，近代化の理論（GNPの物の豊かさ）は技術革新，世界市場化の発達を人間の欲望，消費を煽(あお)り立てて官能主義的にし，その快楽に溺れさせて市場の拡大を図る。したがって，近代化の理論は，消費の自由な拡大を売り上げ額の増大目標に掲げ，供給の技術革新と世界市場化＝グロバリゼーションを進め，「仏教の理念に即した社会を実現する可能性を根底から覆す」と，仏教国の崩壊を孕むことに危機意識を深める。

ドルジェ･ワンモはこうした近代化の理論社会をGNPの物の豊かさの国と見なし，それと対照的に大乗仏教の智慧で精神的な豊かな国を「幸福大国」として対比するが，さらに人間像の類型化を試みる。すなわち，近代化の理論を担う人間像は現実界の代表（資本主義的人間像）として類型化され，GNPの豊かな生活を享受する人間(利己心型)となる。これに対して，仏教国の文化的社会的価値観を担う仏教人がもう一方の人間像(利他心型)として類型化される。すなわち，仏教人の価値観は金剛乗の真理＝観音信仰を絶対的なものとし，精神的豊かさを享受する人間である。ここでは前者の近代化論を担う人間の価値観をマックス・ウェーバーの云う資本主義の精神と位置づけ，後者の価値観を大乗仏教の倫理と見なしえる。

ドルジェ・ワンモは近代化の理論の道と仏教徒の価値観（観音信仰）の実践知の道とを対比させ，人間像の２つの類型を次のように描く。

> わたしたちが懸念しているのは，わたしたちを駆り立てている価値観の問題です。世界の人口の大半が，極度の経済的苦しみに直面していることからして，物質的発展が必要なことは自明です。と同時に，いわゆる「富んだ半球」である北半球でも，心配，不安，ストレスといった精神的苦しみが大きいことを考えると，精神的発展が必要なことは，それ以上に明白です。技術革新，世界市場化といった現象は，わたしたちの欲望および消費をますます煽(あお)り立て，わたしたちをいっそう官能主義的にしています。そうした中で，先進国，開発途上国とを問わず，世界の人々および政府はより良い生活と一層の幸福を確保しようと努力しています。しかし皆様もお気づきのように，現在の経済の主流は個人が消費者であること，そして消費者が強力な支配者であることを正当化し，個人をその快楽に溺れさせています。こうした近代化の中では，人々はいっそう消費に走り，ますます消費の自由を追求します。市場にとっては，それが売り上げを伸ばし，拡張する唯一の道です。こうした近代化の理論は，一般には疑問視されることはありません。しかし仏教徒としては，はたしてそれが倫理的なものなのかどうか，本当の幸せをもたらすものなのかどうかを，考えねばならないと思います。
>
> （ドルジェ・ワンモ，前掲書，242-243頁より引用）

次の５編ではビルマ，すなわち現在のミャンマーを取りあげ，チベット，ブータンの大乗仏教国と相違する小乗仏教，つまり上座部仏教国のミャンマーを探索し，宗教と国家のもう一つの相関図を次のように掘り下げる。

東南アジアは宗教的に多様化し，ヨーロッパと根本的に相違する文明，文化及び人間像を生み出す。その中心となるのはチベット，ブータン，そしてネーパール，日本であり，これらの国々に共通している大乗仏教国を一方の核としている。もう一方の中枢はタイ，ミャンマー，台湾，ベトナム，広東等の小乗仏教国である。

5編　ビルマ（ミャンマー）探索
リチャード・K・ディラン著　女澤史恵 訳
『ビルマの消えゆく少数民族』

序

この本に掲載した写真は，1982年から1997年にかけて何度もビルマを訪れて撮影したものである。このとき私は，ビルマの少数民族にすっかり魅せられてしまった。最初にビルマを訪れたのは，ちょうどビルマが外国人の入国を認めるようになった時期であり，山岳地帯に住む民族に関心を持っている人はほとんどいなかった。私はそうした人々の生活や文化を捕える機会に恵まれたのである。本書は民族学や政治学の調査報告というよりも，写真やそれぞれの部族に伝わる物語を通して，人々のありのままの姿を示すことに力点を置き，急速に消失しようとしている独自の生活様式に焦点を当てたものである。

北は中国とインド，東はタイとラオス，西はバングラディッシュに囲まれているビルマには，インド，中国南東部，チベット，アッサムから移住してきた人々を先祖に持つ，多様な少数民族が暮らしている。こうした部族の多くは，ビルマの国境付近のほとんど道のない奥地，かつて先祖がマラリアに苦しんだ渓谷から遠く離れた，3,000フィートを越す高地で生活している。かつては同じ部族だったが，ビルマの山岳地帯の別の場所で地理的に分断されて暮らすようになった二つの民族は，世代交代が進んだ今となっては，お互いの言語を理解できない。チン州には44もの方言があり，その多くは互いに理解不能である。数世紀にわたる人々の移動や交流にもかかわらず，こうした地理学的な障害によって，独自の文化，民族衣装，言語が保存された。

ビルマには今日に至るまで，未開の地域が存在する。アメリカ国防省の提供する地図には，「境界不明瞭」と記されている。国内の大部分の地域，特に山奥の国境付近には道路がない。彼らの居住領域には舗装されていない道が造られているが，雨期になると水没してしまい，村までたどり着くことができない。

こうした地理的な障害のために，部外者が山奥の民族に接する機会はほとんどなかった。ビルマの大半の人々は，自国の少数民族に会ったことがなく，ましてや外国人なんてなおさらである。こうした少数民族の生活領域で撮影した写真はごくわずかしかない。ビルマ政府は，ネー・ウィン大将が政権を握るようになると，1960年代に少数民族についての調査を打ち切り，文化省の編集した本は増刷が禁じられた。

ビルマの少数民族をさらに詳しく調査していく上で，前世紀に発行されたブリティッシュ・ジャーナルや，第一次世界大戦と第二次世界大戦に山岳地帯の人々を動員した軍人による調査と

いった歴史的，民族学的研究が役立った。驚いたことに，多くの少数民族は百年前とほとんど，あるいはまったく変わっていない。ジョージ・スコット卿が 1900 年に撮影した写真集「上ビルマ・シャン諸州地誌」，あるいは 1922 年の「ナショナル・ジオグラフィック」の白黒写真に載っているブレ（コヨウ族）やパウダン（カヤン族）の人々は，百年後に私が撮影した人々と同じ様式の衣服と装飾品を身に着けていた。

こうした写真の多くは，国内が大きく変動した時代に撮影された。1980 年代には，ビルマに入国許可された外国人はごくわずかしかおらず，戒厳令の敷かれた時期に撮られたものもある。1988 年 3 月，私がラングーンに滞在していた時，軍事政権を揺るがす反政府運動へと発展する衝突が起きた。それを引き金に，民主化運動が国内各地で勃発し，その後，同年 9 月に「国家法・秩序回復評議会」（SLORC）が設置され，新たな軍事政権が全権を掌握した。

SLORC の議長であるソーマウン大将が総選挙の実施を宣言し，軍事政権が勝利すると思われた。しかし，結果は，独立の父アウンサン将軍の愛娘アウンサンスーチー女史が率いる「国民民主連盟」の圧勝と終わった。SLORC はこの結果を不服とし，アウンサンスーチー女史を 1989 年に自宅軟禁とし，6 年後の 1995 年まで解放しなかった。1991 年，アウンサンスーチー女史は軍事政権の圧力に屈せず，毅然と民主主義の実現に向けて尽力している姿勢を称えられ，ノーベル平和賞を受賞した。

政局が不穏な地域では，武装した民族間の闘争が絶えない。近年休戦しているにもかかわらず，ビルマ政府はこうした地域に部外者が訪問することを許しておらず，安全性を保証できないと警告している。表向きは旅行者の安全性への配慮であるとされているが，実際はビルマの人口の大部分に政府の支配力が及んでいないためであろう。政府にとって最も厄介な問題は，少数民族が自治と独自の文化を要求することである。奥地では多くの民族が焼畑農業を営み，5 年から 15 年周期で，痩せた土地を捨て，近隣の土地に移住したり，村ごとそっくり新たな地域へと旅立ったりする。

もう一つの問題は，こうした山岳地帯の民族に「国境」という概念がなく，自由気ままに山々を越境することである。ナガ族の生活圏はビルマとインドにまたがり，カレン族はタイにも入り込み，リス族，アカ族，ラフ族などはビルマ，タイ，ラオス，中国，さらにはベトナムにまで及ぶ。こうした人々はラングーンの中央政権に属している国民であるという意識がなく，独自の民族社会や地元社会に属していると考えているため，中央政府の政策には無頓着である。

軍事政権が実権を掌握しているビルマを旅行すると，何かと困難を伴う。主幹道路や大都市は中央政府の支配下にあるが，ビルマは三つの地域に分けられる。「白い領域」とは，長年にわたって中央政府と SLORC の支配下にあり，旅行者がわりと自由に行動できる地域である。「茶色の領域」では反政府組織が実権を握っており，独自の武装集団を持ち，許可を取れば旅行できる。そして，反政府組織が実権を握り，中央政府の行政力が及ばないのが，「黒い領域」である。この地域の学校，病院，商業は，武装した少数民族のグループが独自の方法で長年運営してきた。

外国人である私は，ビルマの奥地に入り込み，山岳地帯の民族と接触するために，あらゆる手段を講じなければならなかった。ある時は，現地兵や少数民族の助けを得ながら交渉して，村に入ることができた。象の後をついて行くと村に辿り着いたこともあった。また，首長自らが案内してくれたこともあった。

ロイコー地方のザヨウン族などのように，非常に奥深くで生活している少数民族に会うためには，まず彼らの信頼を得るために，無党派の代理人を送らなければならなかった。すると何マイルもの道程を何日間もかけて，中央政府の目が届かず，写真撮影に安全な場所へと彼らを連れてきて，私と引き合わせてくれた。自分だけでなく，家族をも危険にされしながら，こうした少数民族と出会わせてくれた多くの協力者に深く感謝している。

多くの読者と同じように私も，色鮮やかで，この上なく精巧な衣装や装飾品を有する特色豊かな山岳地帯の少数民族に，すっかり魅せられてしまった。それぞれの部族ごとに，独自の模様や色があり，多くの時間と想像力を駆使して装飾品が作られている。こうした装飾品は，身分を示したり，芸術品として存在する。ごく最近までは，働いたり，休む時でも，常に民族衣装を纏っていた。今では儀式のときにだけ，飾り立てた衣装を身につける。洋服 ── ジーンズやTシャツが子供や男性の普段着となってしまったが，女性だけはまだ伝統的な衣装を着ている。

同様に，カチン州では伝統的な大きな琥珀の耳飾りをしているハク族の女性を見かけたものだが，今ではほとんど見かけない。また，戦闘が勃発し，各自のコミュニティー内で生活をやりくりしていかなくてはならない現在，腰を据えて衣装に刺しゅうを施したり，魚を捕まえる籠を編むゆとりのある少数民族の女性はほとんどいない。

少数民族や山岳地方の人々の伝統的な生活が，これほどまでの危機に直面したことはないだろう。ここ数十年間，数え切れないほどの村人や生活集団が，戦闘のために故郷を離れざるを得なかった。年々，西側の影響が強くなってきている。かつては山脈，渓谷，河川といった地理的条件によって守られていたが，それも時間の問題だ。最も奥地で暮らす民族集団でさえ，領地を横切る道路によって近隣の民族と結ばれるようになり，彼らの生産する農作物を求める外部からの影響を一層受けるようになるだろう。さらに，40年以上も政権を求めて戦ってきた少数民族の指導者たちには，開発と経済発展に対する要求が強いのも事実である。

こうした圧力が強まるにつれ，耕作可能な土地が不足するようになり，地元の権力者との衝突だけでなく，民族間でも対立状態に陥った。その結果，昔から住んでいた多くの民族が居住地である山岳地を離れて独自の生活習慣を捨てたり，あるいは近隣の民族に吸収されていった。1987年に私が撮影したロイレム近隣で生活するインネットやインセットの人々は村を焼かれ，さらに奥地へと逃げ込んだ歴史を持つ。タウンヨー族は数年後にはパオ族に吸収されるだろう。カチン州では，ハク族，アジ族，マル族，ラシ族などの構成人数の少ない少数民族は，ますます減少し，ヌン・ラワン族は，人口の多いジンポー族の文化に影響を強く受けるようになるだろう。シャン州では，イネットとインセットが急速に減少し，ワ族，パラウン族，アカ族，ラフ族などが比較

的ゆっくりとシャン族に吸収されていっている。ラオスに多く生活しているモン族と同じように，ビルマ国内の少数のモン族もタイの国境付近に惹きつけられるように移動し，チェンマイの市場やバンコクの路上で工芸品を売っている姿が見られる。

タウンヨー族は，パオ族と同じような衣服を着用している。インダー族の人口は増加しているものの，インレー湖からの収穫だけでは賄えなくなるだろう。アラカン州は，およそ200年前にボードパヤ王が侵略し，マハムニ・ブッダの絵が消失して以来，ビルマ族が最大勢力である。

カヤー（カレンニー）州とカレン州では，中央政府とカレン族集団の間に15年に及ぶ戦闘が繰り広げられ，10万人以上のカレン族が難民として国境を越えてタイへと避難した。パダウン族の女性はタイに連行され，俗に「キリンの首の女」と呼ばれ，旅行客への見世物となっている。彼らは，農業よりも観光産業から多くの収入を得ている。

チン州の先住民族であるチン族やナガ地方のナガ族は，50年ものあいだ隔絶した状態にあり，現在でも外部との接触は少ないが，それでも外部からの影響を受けている。ビルマ政府は，チン族の女性が顔に入れ墨を入れるのを禁止している。

ワ族の多くは，現在でもシャン州東部で独自の組織を形成して生活している。今後もアヘンを栽培し，武器を運搬しながら勢力を強めていくだろう。しかし，近年の反政府組織に対する圧力の増大により，中国からの影響を大きく受けるようになり，今ではワ族の大半は，伝統的な民族衣装ではなく緑色の中国軍服を着ている。

今後，ビルマの少数民族 ── 特に多種多様な山岳地方の人々が，20世紀そして21世紀の複雑な変化にどのように適応していくのか，予測するのは難しい。民族集団は自分たちの居住領域を求めて移動を続けるだろう。しかし山岳地方では，誰が神話や歴史と関わりのある指導者となれるだろう？　伝統的な医術の知識はどうなるだろう？　民族の子供たちは学びたがっている。しかし，彼らは将来に希望を抱いていない。居住できる自然豊かな山脈も，耕作するための人跡未踏の草原も，釣りをする未開発の川もないのだ。

ビルマの少数民族は，これまでずっと生存，存続に不安を抱えてきたが，次世紀を迎え，新たな変化がもたらされるだろう。独自の伝統的な生活様式を持続させようと模索する民族もあれば，かつて素晴らしい文化が存在したという形跡を残しながらも消滅してしまう民族もあるだろう。

本書では私は実際に目の当たりにした，多様な民族から構成されているビルマを紹介する。部外者にとっては時代遅れに思われる生活様式を維持しようと苦悩している人々を映し出している。彼らの生活は困難を伴うが，急速に変容する世界に直面しながらも，独自の生活に強い誇りを持って生きている。

自著が，ビルマの少数民族の独自の伝統を未来の世代に受け継いでいく一助になれば，大変光栄である。それが叶わなくても，少なくとも，写真記録として残るだろう。孤立して生活するようになった時期に関わらず，ビルマのこうした多様な民族が見知らぬ人に笑顔を向けられる日々が続くよう，切に願っている。

第1章　ビルマの地理的特徴

ビルマの変化に富む地形が，多種多様な民族を生み出した大きな要因であるかもしれない。中央を流れるイラワジ川（新称エーヤワディー川）流域をU字形に取り囲む広大な山脈は，数世紀もの間，武装した部外集団の侵入を阻止してきた。同時に，こうした山々と深い渓谷の地で，多くの少数民族は常に移住しながら生活してきたのも事実である。お互いに混ざり合うことなくすれ違っただけのこともあれば，部族間結婚や他民族文化との融合が認められる場合もあり，より奥地へと移り住み独自の文化を発展させていった民族もいる。

それぞれの地域は，多様な少数民族の歴史や経済が色濃く反映されている。カチン族とナガ族が住んでいるビルマ北部には，ヒマラヤ山脈に連なる冠雪の高峰がそびえ立つ。南部は，熱帯雨林に覆われ非常に気温が高い。テナセリウム地方のモン族，タヴォヤン族，サルム族などが勢力を持っている。イラワジ川河口の肥沃な平地の主要作物は米であり，英国支配下の時代に「アジアの米びつ」との異名をとった。シャン州の山岳地方では，森林に覆われていない土地でアヘンが栽培され，世界最大の規模となっている。その他，天然資源にも恵まれ，カチン州では翡翠，シャン州ではルビーが産出され，ラカイン海岸では未開発の海が広がっている。

居住様式は，社会や政治の発展に大きな影響を与えてきた。モン族とビルマ人は日差しの強い中央の平地で，水稲を栽培しながら大都市を築いてきた。一方，シャン族は北東部の山岳地方といった高地にいくつもの領地を抱え，常に同盟関係を変化させてきた。さらに山奥へと行くと，カチン族，ワ族，チン族といった少数民族が，移動耕作を行いながら自給自足の生活を営んでいる。

こうした移動の過程で，それぞれの民族は各地で独自の文化を発展させてきた。かつてビルマ南東部のサルウィン川流域の東部へと移動したカレン族は，主にカヤー州の荒涼とした山岳地帯やタウングーよりも高地へと移り住み，非常に多様な文化を発展させた。

対照的に，中央部のイラワジ地方やシッタン川流域といった低地ビルマに移動したカレン族は，数世紀を経た今，水稲を栽培し，仏教を信仰し，近隣のモン族やビルマ族の生活習慣を多く取り入れている。

このような複雑な過去から，民族の居住地や名称は未だに統一されていない。ビルマの国名も，かつてはバマー，ミャンマーのように異なる名称で呼ばれていた。

第2章　民族集団

1．ジンポー族

ジンポー族は，マリカ川とンマイカ川に沿ってビルマへとやってきたチベット・ビルマ語族に属するカチン人のなかで，最も人口の多い民族集団である。現在は，チンドウィン川とイラワジ

川(エーヤワディー川)の上流からビルマ北東部にかけて広がる広大な山岳地帯，カチン州とシャン州北部に居住している。ジンポーという名称は「人」という意味である。

カチン人全般がそうであるように，ジンポー族も歓待の心をとても大切にする。友人だけでなく，人種や宗教に関係なく見知らぬ人のおもてなしを拒まない。また，末の男子が本家筋を継いで村に留まる。兄たちは仲間たちと一緒に，遠かれ近かれ，村を離れて新たな土地で生活をする。こうした風習や，人口増加，移動耕作に伴い，何世紀もかけてジンポー族は徐々に南方へ移動してきた。

2．ハク族

ハクとは「川の上流」を意味する。ハク族は，マリカ川やンマイカ川の流域を占めているジンポー族よりも，北部に住んでいる。ハク族以外にジンポー語を話すのは，ティンナイ族とガウリ族である。

イギリス統治時代，ハク族とジンポー族には明確な伝統的相違が認められ，「北部カチン人」として認識されていた。カチン人のなかでも長身であることが知られていた。

この地に移住してきたシャン族は，高地の平野や溪谷に居住しているが，ハク族やほかのカチン人は，森林や山間部で移動耕作を営んでいる。

3．ラワン族

ハク族の居住地より北部にあるプタオ周辺や中国とチベットの国境付近に，チベット・ビルマ語族のカチン人に属するラワン族が住んでいる。ヌン語と関連のあるカチン語を話す。

カチンの伝説によると，ヌン・ラワン族はカチン人家族の六人兄弟の長男の子孫であると言われている。今日でもラワン族は，部外者がほとんど訪れることのないビルマの人里離れた山岳地帯で暮らしている。イギリス統治下になって初めて，この地域の「非常に小さい民族」について報告されるようになった。身長が低いヌン･ラワン族の支族について言及したものだと思われる。

ヌン・ラワン族の領域のはずれに，今でもチベット人の村がいくつか存在する。このことは，チベット・ビルマ人からビルマの多様な民族が派生したことを示唆している。

4．アヅィー族

アヅィー族，マル族，ラシ族などのカチン人は，ジンポー族やハク族よりも前に，チベットや中国の国境沿いからビルマに移住してきたと考えられている。アヅィー族は，カチン人の五大民族集団の一つであるラパイ族に属すると信じている。その他には，マリップ，ラタオ，ンクム，マランがある。アヅィー族は，マル族やラシ族と関係が近い。ンマイ川とマリカ川の合流点の南側に住み，一般的にカチン人と同化している。

アヅィー族とジンポー族との関連性は，先祖代々の首長 duwa を辿るカチン人の慣習に見て取

れると考えている学者もいる。アヅィー族の首長の家系が途絶えても，ラパイ族の首長duwaを選出して，ラパイ族あるいはジンポー族として語り継がれるだろう。

5．マル族

マル族は，カチン人のなかで二番目に人口が多い。伝説によると，ラパイ族女性と中国人男性の子孫であるらしい。

アヅィー族やラシ族と同じように，マル族もイラワジ川上流のンマイカ川に沿ってビルマへと移住してきたと考えられている。一方，ジンポー族とカク族はマリカ川沿いにやってきた。

ジンポー族と同じカチン人であるとされているマル族は，より近しい関係にあるアヅィー族やラシ族とも比較的自由に結婚している。衣装は他のカチン人とほとんど差異はないが，日常会話にビルマ語を多く取り入れている。対照的に，ジンポー族はカチン語だけを用いる。

6．ラシ族

関係の近いアヅィー族と同じように，ラシ族はマル語を話し，中国とビルマの国境沿いに多く住んでいる。ンマイカ川下流域のマル族が多い地域に居住している。

ラシ族もジンポー族も，黒い布を頭に巻き，黒く丈の短い上着を羽織り，数珠状に連なった銀の首飾りをつけ，外見上の相違はほとんどない。しかし，ビーズやペンダントの飾りの付いた大きな筒状の銀の耳飾りから，ラシ族の女性だと判別できることもある。耳飾り用に耳に三箇所穴を開けていることも珍しくはない。

山岳地帯では，祖先信仰や精霊信仰を続けているラシ族もいる。他のカチン人と同様，この百年で，多くはキリスト教に改宗したが，今でも儀式のときには伝統的な民族衣装を着用する。

7．シャン族

カレン族と並んでシャン族は，ビルマ族に次ぐビルマ第二の規模を誇る少数民族であり，主にシャン州に居住している。多くは渓谷に住んでいる。この地域の最初の住民であり，今でもタイ人が住んでいる中国南東部の雲南省からやってきたと考えられている。

シャン族の一派がメナム峡谷にかけて南下し，シャム人あるいはタイ人として知られるようになった。1287年にモンゴル帝国がパガン王朝を侵略したのに続き，シャン族は上ビルマに勢力基盤を築き，現在のマンダレー郊外にあるアヴァを首都とした。およそ200年間，イラワジ川中流域の肥沃な稲作地帯を支配し，カチン州やチンドウィン川流域へと拡散していった。

19世紀のイギリス統治時代には，伝統的な王sawbsaの存在が確認されたが，1959年にネ・ウィン将軍の率いる政府と合意し，世襲の王政を廃止した。しかし，中央政府とシャン族の反政府組織は，今日まで散発的に闘争を繰り返している。

８．ヤオ族

シナ・チベット語族に属するヤオ族は，中国雲南省，ラオス，ベトナム，タイ北部，ビルマの国境周辺の奥地で生活しているのが確認されている。自称はミェンであるが，ベトナムやラオスではマン族として知られている。

多くのヤオ族は中国語を話せるため，この地域では非常に繁栄している民族集団である。アカ族，リス族，ラフ族などの貧しい民族から養子をもらい，ヤオ族として育てる慣習がある。自分たちの子どもを他民族に養子に出すことはない。

ヤオ族は，石弓や自作の銃で鹿を狩る。また，金属加工の技術も高く，他民族に売るための複雑な装飾品や銃身を作っている。

９．モン族（Hmong）

モン族（メオ族）は，中国南部から，あるいは中央アジアの山脈を超えてきたと考えられている。中国人が到達する前に中国中央部を占有していた，同じ民族集団に属するヤオ族のように，非常に古代の人々の子孫であると言われている。父系の部族制度を維持しながら，何世紀もかけて雲南省，ラオス，ベトナム，タイ，ビルマの国境周辺へと散開した。モン族の伝説では，故郷は極寒の地であると言われており，現在でも衣服には雪の結晶模様を刺繍している。だが，ビルマのモン族はここ何世紀も雪を見たことがない。

モン族は，シャン州東部とタイとの国境付近の山岳地帯の中でも標高の高い地域で唐辛子，とうもろこし，ケシを栽培して暮らしている。裕福なケシ栽培農家の中には，複数の妻を迎える者もいるが，結婚費用と生活費を支払える場合にだけ認められる。

モン族の女性は，非常に美しい刺繍の技術で知られている。

10．アヘンとタバコ

多くのビルマの山岳民族は，現金作物としてケシを栽培する。その栽培地域の大部分は，シャン州である。アメリカの精製ヘロインの半分は，ラオス，ビルマ，タイにある黄金の三角地帯から流入している。ビルマは不法なアヘン原料の最大輸出国であり，年間 2,000 トン以上生産している。

アヘンの取引は，紛争地帯の村で唯一の収入源であると同時に，山岳地帯の反政府武装組織にとっても重要な資金をもたらしてきた。ケシ栽培地域の大部分は，反政府武装組織に支配されている。政府と停戦に同意している組織もある。どちらにも属していない司令官も存在し，最も悪名高いのが，チャン・シ・フである。麻薬王クン・サの呼び名のほうが有名である。15,000 人から成る「モン・タイ軍」を統率していたが，1996 年に政府との間で停戦合意をして投降した。

11．パンゼー族

パンゼー族（自称フイ・フイ）は，もともとは中国人イスラム教徒で，中国とビルマ間の貿易運搬のラバ追いとしてビルマにやって来た。彼らは，ペルシア，アラブ，中央アジアのイスラム教徒の貿易商の混血子孫であると考えられ，13世紀から14世紀に中国へと移り住み，順応していった。パンゼー族は，隊商の運搬係として知られ，中国からはるか南方のラングーンやモールメインまで商品を運ぶ。彼らは主に貿易に従事し，家庭内の仕事を奴隷にさせることも多い。

他の中国人子孫同様，ビルマのパンゼー族はシャン州に散在している。また，中国との国境付近のワ副州やコーカン地区にも居住している。

12．リス族

チベット・ビルマ語族であるリス族は，過去の大洪水で生き残った唯一の人々の子孫であると信じ，チベット東部が故郷であると主張している。彼らは，チベット東部，雲南省西部，カチン州やシャン州からタイとの国境にかけて，広範囲の山岳地帯に散在している。中国語をはじめとして，複数の言語を話せるリス族男性は，それほど珍しくはない。

リス族の住んでいるカチン州の村人は，山岳地帯の雲よりも上方の高地にあり，寒い土地である。リス族は防御しやすいように，多くは山頂や尾根の竹や樅の茂る，部外者が近づけない場所に村を築く。

新年を祝う祭典では，村の少女たちは，将来夫となる男性の目に止まるように，盛装して装飾品で飾る。村中で盛大な祝宴が数日にわたって催され，皆で飲食し，踊る。

13．パラウン族

パラウン族（自称タアン）はモン・クメール語族に属する。主にシャン州北部の山岳地方に住み，茶の栽培で知られている。ビルマとシャンの人々は，服装から「金のパラウン族」と「銀のパラウン族」に分けている。

伝統的な精霊信仰も根強く残っているが，パラウン族の多くは仏教徒であり，各村には寺院がある。だが，こうした集落も，この三十年間に及ぶ軍事闘争によって大きな被害を受けてきた。

パラウン族の住んでいる村の１つに，シャン州東部のカローよりも高地にあるピン・ネ・バン村がある。カロー市場で見かけるパラウン族の民族衣装は，山岳民族の中でも色使いが鮮やかである。女性は，赤の縞模様のロンジーの上に，赤，ピンク，黒，青の上着を羽織っている。カチン族の女性同様，パラウン族の既婚女性も，腰に銀の輪やビーズの飾り紐と一緒に，漆塗りの竹の輪をつけている。

14．パオ族

パオ族（ビルマではトンスーとして知られている）は，シャン州でシャン族に次いで，二番目に人口の多い少数民族である。カレン人の支族であり，カレン語と似た言葉を話すが，シャン州の多くのパオ族はその関係に気付いていない。地元の伝説によると，11 世紀にパガン王朝のアノーヤター王との戦いにモン族の王マヌハが敗れた後，パオ族は下ビルマのモン族の町タトンから北に向かって逃げ，シャン州にたどり着いたとされている。行商人の仏教徒である彼らの多くは，シャン州西部のタウンジーやカロー周辺の山岳地帯に暮らしている。そこでは，コルディアの木から取れる葉が主要な現金作物であり，ビルマの伝統的なタバコであるチェルートを巻くのに用いられる。

パオ族は，シャン族と同じようにゆったりとしたズボンに，上着とターバンを着用するが，衣装の色は黒である。女性は，ルンギー，長袖のシャツ，丈の短い長袖の上着を着用する。頭には色鮮やかなターバンを巻く。

15．タウンヨー族

シャン州のタウンヨー族についての詳細はほとんど知られておらず，謎に包まれている。地元のインダー族やダヌ族と同じく，タウンヨー族もビルマ語の方言を話すようだが，一緒に暮らしているシャン族やパオ族の文化や言語からも影響を受けている。多くはインレー湖より高地にあるヘロ地方の山岳地帯に住んでいる。J.G. スコット卿によると，タウンヨー族はビルマ南東部のモン州に位置するタヴォイから避難してきたか，奴隷として連行され，シャン州の現地人と結婚し，その子孫であるとされている。

これらの写真は，カロー郊外にあるトン・パクのタウンヨー族の村で撮影したものである。入村の前に，ビルマ警察から安全ではないので訪問しないほうがいいと忠告された。

タウンヨー族の男性の衣服は，シャン族と似ているが，女性は大きな銀のイヤリングとブレスレットをしているので簡単に見分けられる。脚には真鍮のコイルをつけている。既婚者は銀のコイルを膝下に，独身者は足首につける。

16．リアン族

シャン州のごく限られた地域に散在しているリアン族の歴史は，ほとんど記録として残されていない。ワ族やパラウン族と近い関係にあると考えられているが，リアン族の多くはシャン語も話す。パラウン族の南方血族であると主張する学者もいれば，カレン族の血族であるとする者もいる。

リアン族は主に 3 つの支族に分けられ，黒リアン族と縞リアン族などがいる。両支族の男女共に，前歯の四本に金を被せ，ルビーや翡翠が散りばめられている。こうした装飾が非常に美しい

とされている。インネットの少女は，漆塗りの輪を腰につけ，円形の銀板に色とりどりのビーズをあしらったイヤリングをつけている。一方少年は，シャツに綿の房を付けている。

17．アカ族

中国南部の雲南省が起源とされているアカ族（コー）は，中国，ラオス，タイとの国境付近のシャン州南東部に住んでいる。アカ族は7つの支族に分かれて，7人兄弟の子孫であるとされている。先祖は古代ロロ人であり，チベット・ビルマ語を話し，ラフ族やリス族と関係が近いとされている。

多くのアカ族はケンタン周辺の山間部で，とうもろこし，タバコ，サトウキビ，ケシなどを栽培している。また，タイ北部，ラオス，中国雲南省にもアカ族の集落が見られる。こうした集落での生活は，困窮していることが多い。

アカ族女性の頭部装飾は印象的で，支族によってそれぞれの特徴があり，まるで銀のヘルメットのようである。大きな銀の飾りが連なり，竹の帽子に縫いつけられたビーズが散りばめられている。また，刺繍の施された青や黒のレギンスを穿き，濡れた葉から落ちて肌を刺すヒルから身を守っている。

18．黒ラフ族

ビルマには10万人以上のラフ族がいる。そのほとんどがケントン地区周辺に住んでいる。J.G.スコット卿は，チベット周辺がラフ族の故郷であると考えていた。一方，ラフ族自身はもっと北方地方が出身地であり，中国の王朝に弾圧されて南部へと移住してきたと主張している。

多くのラフ族がビルマへやってきたのは，19世紀になってからのことである。それまでは，多くはタイに住んでいて，狩人という意味の「ムソー」として知られていた。ラオスでの戦闘によって，1970年代に多くのラフ族は故郷を失った。

ビルマでは，ラフ族はいくつかの下位集団に分けられ，黒ラフ族（ラフ・ナ），赤ラフ族（ラフ・ニ）などがある。織物の技術が高く，精巧な籠を作ることで知られ，他民族よりも高値で売れる。ラフ族は，稲，唐辛子，そして現金作物としてケシを栽培し，自分たちも吸う。

19．赤ラフ族

赤ラフ族（ラフ・ニ）は黒ラフ族と非常に関係が近いが，衣装にわずかな違いが認められる。黒ラフ族とは違って，赤ラフ族の女性は髪を剃ったり，中国人の様に高い位置で結ぶことはない。

ラフ族は精霊信仰者であり，伝統的に救世主的な宗教指導者，自称ボン・ヤに統治されている。彼らは天上の神の声を人々に伝えている。

神や悪魔の精霊を今でも信仰しているが，多くの平地のラフ族は仏教も取り入れ，さらに20世紀になってからこの地域に協会を設立したイギリスやアメリカの宣教師たちによってキリスト教

へと改宗した者もいる。

いずれにせよ，山岳地帯では，グーシャという神を信仰しているラフ族がいる。

20．インダー族

インダー族とは，「湖の子どもたち」という意味があると言われ，ほとんどのインダー族はシャン州のインレー湖上あるいは周辺で暮らしている。独特なビルマ語の方言を話し，彼らの起源は謎が多い。パオ族やタウンヨー族と同じように，何世紀も前に下ビルマからやってきたと考えられている。ある説によると，ナラパティシードゥー王の統治時代（1174～1210 年）に北方へ移住した南方ビルマ族の子孫であると言われているが，モン族やタボヤンと戦闘を繰り返している間に捕虜となった奴隷に由来するとする学者もいる。

インダー族は，非常に高い船の操縦技術で有名である。片方の手と脚を櫓に巻きつけ，もう片方でバランスを取りながら，舟を進ませる。この姿勢をとることで自由に使えるようになったもう片方の手で，湖の浅瀬を泳いでいる魚に大きな円錐形の網を投げ落とす。

21．ワ族

言い伝えによると，歴史が始まったときから，ワ族はシャン州東部の領域に住んでいたらしい。ビルマには 10 万人以上のワ族が住んでいる。豊作祈願の儀式や宗教儀式の一環として，最近まで首狩りを行なっていたことで有名である。今からわずか 20 年前に，チェントンへ向かう道中に頭部のない死骸を見かけた。Laklai 村では 300 もの人間の頭蓋骨が，村に通じる道路に並んでいたと言われている。

ワ族は，頭蓋骨を悪霊から守ってくれるものであると考えている。頭蓋骨がないと，家族が死に，作物は実らず，祖先が激怒すると信じている。見知らぬ人の頭蓋骨は，特に重宝とされる。その死体の魂は，家路がわからないからである。

ワ副州のほとんどは不毛な土地であり，山の森は荒廃している。ケシは重要な現金作物であり，隊商が通り抜けていく。

22．カレン族

カレン族の祖先が渡ったと言われている「流砂の川」にまつわる話が，伝説として残っている。カレン族は何世紀にもわたってビルマに住んできたにもかかわらず，多くはその伝説をゴビ砂漠のことだと思っている。おそらく，かつてカレン族は中国からビルマに流れ込むイラワジ川，シッタン川，サルウィン川流域に住んでいたが，何世紀にもわたって，ビルマ族やモン族から弾圧を受け，南東部の山岳地帯やイラワジ川のデルタ地帯の森林地帯に避難してきた。

カレン族の下位集団のなかでは，カレン族がビルマ族とシャン族に次いでビルマでは人口が多い民族である。カレン族とはたいてい，タウングー周辺のブエ語族同様，ポー族，ソウ族などの

主要な下位集団のことである。ビルマには400万人のカレン族が住んでおり，そのうち半分がデルタ地帯に，残りがタイとの国境付近に住んでいる。ほとんどは仏教徒であるが，東部山岳地帯では未だに精霊信仰が残っている。そして，およそ20パーセントがキリスト教に改宗している。

23．カヤー族

カヤー族はカヤー州最大の民族集団である。頭に巻いている布やショールの鮮やかな色使いからカレンニー族（あるいは赤カレン族）と呼ばれるようになり，今日ではカレン族に属する全ての部族を表すようになった。

カヤー族は，ポー族，ソウ族，パオ族と並んで，カレン族の四つの主要な言語支族の一つである。1951年にカレンニー州が政府によってカヤー州と改名された。これは独立を求めて逃走を続けていたカレンニー族とカレン族とに亀裂を生じさせようと画策されたものだとする説もある。今でもアニミズムが信仰されているが，多くのカヤー族は，他のカレンニー族と同じように，この百年でキリスト教に改宗した。

カヤー族の女性は膝から下に黒い布を巻きつける風習があり，ビルマ人から「象女」とも呼ばれている。

24．ブエ族

カレンニー地区にいるカレン族の少数下位集団であるブエ族の起源については，ほとんど知られていない。ブエ族とは，カヨー族とミノ・ミナ族の二つに近い関係の集団の呼称としてよく用いられる。実際，この地域のカレン人の多様性から，カレン人由来の地は，カレンニー州西端の山岳地帯であり，そこでカレン文化が多様化し発展したと考えている学者もいる。ブエ族は，人里離れた山奥を好む。このように警戒心の強い行動をとるのは，部外者によって奴隷とされた歴史的経験から当然のことである。

ブエ族の領域は，カヤー州のほぼ全域と同じように，近年の闘争で大打撃を受けている。写真を撮るため，シャン州にいる私のところにブエ族を運ぶトラックがカヤー州に向かった。ブエ族の友人の導きで，なんとか警戒心を解くことができた。1922年に発行されたナショナル・ジオグラフィック3月号に掲載されていた写真とまったく変わらないブエ族の姿を見て，私は驚愕した。

25．パダウン族

パダウン族は，カヤー州とシャン州の150平方マイルに及ぶ，サルウィン川西部とペコン地方の山岳地帯周辺の標高5,000フィートの高地にいる。何世紀ものあいだ，珍しい存在であり，見世物としてマンダレー王の宮殿に連れて行かれたこともあった。パダウン族はカレン族の下位集団カヤン族に属する。一般的にはパダウン族として知られているが，自称はカ・カウンであり，「山頂に住む人々」という意味がある。近年になって，多くがキリスト教徒になった。

真鍮のコイルで首を完全に被う習慣から，パダウン族の俗称として，「キリンの女」とか「首長族」と呼ばれることも多い。この風習は急速に失われ，今日では限られた村でしか見られない。パダウン族の少女は5歳から9歳になると，犬の脂肪，ココナツミルク，ローヤルゼリーで作った軟膏を首に塗り込まれ，最初の輪が装着される。それから二年後に，次のコイルが加えられ，結婚するまで毎年新たな輪が足されていく。

26．ラタ族

ラタ族またはザヨウン族は，ペコンやピンラウンから30マイルほど西にある，シャン州と接している北部カヤー州沿いの，松林に覆われた険しい山岳地方に住んでいる。カレンニー軍同士あるいはパオ民族機構やビルマ政府軍とのゲリラ紛争が頻発し，ラタ族の居住地域への道路は閉鎖されているため，居住地区外で会うことになった。ラタ族と会うために，私は標高6,000フィートの森林に覆われた山岳地帯を14マイルほど登って行った。

ラタ族は，赤い縞模様のシャツまたは短いロンジーの上に，白いスモックか上着を着ている。女性は伝統的に手首から肘まで真鍮のコイルをつけ，腕の動きが制約されている。前腕が曲がらないので，食事を口の中に放り込むようにして食べる。

どこのラタ族の村でも，長老や祈祷師がいて，村人から結婚の時期，狩猟の時期，種まきの時期などの相談を受ける。

27．インバオ族

インバオ族は，カヤン族の下位集団であるカレン族に属する。しかし，政治上はたいていカレンニー族として扱われる。多くは，カヤー州のカンタラワディやボーレク地方の平地に住んでいる。実際，自称はカン・ナンで，「平原の住民」という意味のカレン語である。歴史的記録はほとんど残っていない。

他のカレン族と同じように，インバオ族も伝統的に精霊信仰だったが，19世紀にアメリカ人の宣教師がカヤー州にやってくると，多くがキリスト教に改宗した。三月から五月の間に，インバオ族は年に一度の精霊祭を催す。祭りの目的は，幸運を願い，飢餓や病気を回避することである。多くの村では，政府軍との長引く闘争で打撃を受けているが，こうした習慣はカヤー族，ブレ族，カヤン族でも見られる。

28．モン族

モン・クメール語派の代表格であるモン族は，おそらく早い時期からビルマの平野部に移り住んできたと考えられている。当時，東南アジアで最も文明的な民族として知られ，芸術や建築物からもその片鱗が窺われる。モン族は仏教と文字をビルマに伝え，紀元の初め頃にはインドと通商関係を築いていた。モン族の記録は15世紀ころから残っており，モン地方の定住者として，世

界的に有名なラングーンのシュエダゴン・パゴダを創立したと信じている。

1757年にペグーが陥落するまでの千年間にわたって，モン族は，タトン，モルダバン，ペグー地方の大都市から下ビルマの大部分を支配していた。多くのモン族は，東南アジア全域がモン族の支配下にあったのは，祖先が芸術や文学よりも戦士として優れた民族であったからだと信じている。

モン州には，山の露岩の端の不安定な場所に設置されているチャイティーヨー・パゴダがある。

29．アラカン州

ラカイン族は，アラカン州で最も多い少数民族であり，近接しているインドからの影響を大きく受け，貿易を通じて強いつながりを築いてきた。1784年までミャウ・ウを拠点とした王国として長く独立していた歴史があると主張している。

王や仏教の記録は西暦元年前後にまで遡るが，同一人物について述べたものかどうかは定かではない。チャンドラ・スーリヤ王の時代の146年に，仏教が国教となったと信じられている。現在でもラカイン族の大部分は仏教を信仰している。

ラカイン族は，初期に確立された言語であるとされるビルマ語の方言を話す。また，文化や衣装もビルマ族に極めて類似している。アラカン州の人口のおよそ四分の一が，ロヒンギャ族と呼ばれるイスラム教徒であり，そのほとんどがベンガル人の子孫である。その他にも，山岳地帯に住んでいる，テット族，カミー族，ダインネット族，マラマギー族などの少数民族も含まれている。

30．チン族

チン族またはゾミ族は，インド北部のミゾラム州へと続くビルマ西部に連なる山脈地帯に住み，チベット・ビルマ語派に属する。険しい地形のために，何世紀にもわたって村人の往来はほとんどなく，非常時の時だけ低地に住む隣人を頼らざるを得なかった。

40以上もの下位集団があるとされ，顔の入れ墨と衣装で区別される。ビルマにはおよそ150万人のチン族がいることが確認されている。民間伝承によると，入れ墨の習慣は千年ほど前から始められ，ビルマ族の男性がチン族の女性のあまりの美しさに惹かれて襲撃しようとしたことが発端だとされている。恐怖を感じた女性たちが，魅力的でなく見えるように，顔に入れ墨をするようになった。また連れ去られてもチン族の男性が見つけ出せるようにという意図もある。

31．ナガ族

ナガ族という名称は，チベット・ビルマ語の方言を話し，インドとビルマの国境周辺の山岳地帯に暮らしている，多くのインド・モンゴロイド語派の民族を包括している。ビルマ北部のパットカイ山脈には約10万人のナガ族が暮らしているが，インドには100万人ほどいる。伝統的には

気性の荒い戦士であり，最近まで首狩りを行なっていた。ナガ族はインドやビルマの政府軍による襲撃から土地を守ってきた。

社会の平穏や穀物の豊作を願って首狩りを行うワ族とは違って，ナガ族は個人的な栄光や村の繁栄のために首を狩る。首狩りの習慣は，この 20 年間で消失したと思われている。ワ族は頭蓋骨を買うこともあるが，ナガ族は買わない。けれども，首を切り落とすために奴隷が連行されることはある。首は竹林の上部についている籠に入れられ，眼窩には矢が刺される。そうすることで亡霊が村を守ると信じている。

32．ビルマ族

上ビルマおよび中央平野部は，伝統的にビルマ族の居住地である。ビルマ族は，11 世紀までに北部や中国とインドとの国境付近から移住してきたチベット・ビルマ人の子孫である。ビルマ族はイラワジ川沿いに 1044 年から 1287 年にかけて素晴らしい首都パガンを創立した。のちにアヴァ，アマラプラ，サガイン，マンダレー，タウングーに首都を築いた。

今日では，ビルマ族がビルマ国内で最多の少数民族であり，3,000 万人ほどいるとされている。ビルマ人口の約 60 パーセントを占め，ビルマ族だけがビルマ語を話す。この 100 年間で，ビルマ族が新たな領域へと居住地域を拡大するのに伴い，モン族やカレン族といった多くの人口の少ない民族が，ビルマ族に同化していった。

モン族と同じように，熱心な仏教徒であるビルマ族の豊かな文化には，インド文明の影響が認められ，パーリ語で書かれた仏典（後にサンスクリット語に取って代わられた），宇宙論，哲学，国政術，芸術，医術，建築などに見られる。

第 3 章　民族の歴史

ビルマの複雑な民族の歴史の多くは神秘に包まれている。1974 年に制定された現在の政治地図では，ビルマ族以外の主要な民族集団 —— チン族，カチン族，カレン族，カヤー族（カレニ族），モン族，ラカイン族，シャン族 —— を基盤として 7 つの州に分けられている。実際，ビルマには 100 以上の異なる言語や方言がある。しかし，最近の人類学的研究によると，ビルマの多様な支族は 4 つの民族 —— モン・クメール族，チベット・ビルマ族，タイ族（シャン族），カレン族 —— から派生していると考えられている。カレン族はチベット・ビルマ族の遠縁の支族であるという説もある。

ビルマは，多くの移民が流入してきた歴史を持つ。その一方で，原住民のピュー族は消失してしまった。移民の多くは，地理上比較的容易な北方から尾根や河川を越えてやってきた。

最初にビルマやってきたのはモン・クメール族である。下ビルマの仏教徒であるモン族や，血縁関係にあるシャン州で生活している山地民のワ族やパラウン族が，今日では知られている。次

にやってきたのが，カレン族とチン族の祖先だろうと考えられている。最初のビルマ族，あるいはラカイン族などのビルマ語を話す民族集団は，西暦元年ころに出現し始め，北方から多くのビルマ族が移住するのは9世紀から10世紀になってからだろう。ビルマ族はイラワジ川の上流地域に住み，その後パガンに王国を築き，やがて首都をタウングー，アヴァ，アマラプラ，マンダレーに移した。

同じ時代に，シャン族（タイ族）は中国南西部のヤンナン省から山脈を越えてやって来た。13世紀までに，ビルマ北東部から海岸に向かって占領した。そして，もう一つの大きな民族移動として，ラフ族，アカ族，カチン族といったチベット・ビルマ語族に属する山地民の流入が挙げられる。

1800年代にイギリスがビルマを併合するまで，渓谷や都市国家の間では武力衝突が絶えることなく，ビルマ族，モン族，ラカイン族，シャン族が勢力を拡大していった。山岳地方では，山岳民族が武装集団からの襲撃に抵抗していた。しかし，文化的，政治的に重要なものは，常に異民族間でやりとりされていた。

こうした歴史によって，民族が複雑にモザイク状にからみあった今日のビルマとなった。単一民族だけが居住している地域はほとんどなく，言語や文化を共有することで，多様な変化をもたらしてきた。チベット・ビルマ族の中でも，平地に居住するラカイン族やタボヤン族の話す方言は，多勢のビルマ族の言葉に近い。一方，山岳民族のチン族，カチン族，ラフ族は，まったく異なる文化を発展させ，また山地民間にも多くの相違が認められる。

1885年から1886年の第三次イギリス・ビルマ戦争後，イギリスはインド帝国の新たな州として広大なビルマを統治しようとして，二重構造の統治制度を導入した。大多数のビルマ族が居住している中央平地を拠点としている「ビルマ政府」と，伝統的な支配や指導者によって統治されている少数民族が組織する「フロンティア・エリア」の間には，政治的隔絶が存在するようになった。

イギリスがビルマを合併する直前には，シャン族の生活領域にはそれぞれの王が統治する33の支族があり，村の指導者が市民生活，犯罪，経済問題を取り仕切っていた。そこへイギリスは，王と政府の行政官による二重統治制度を導入し，タウンジー，メイミョー（現ピンウールィン），ラショー，クッカイなどの重要な地方都市に行政組織を立ち上げた。

「パクス・ブリタニカ」をもってしても，人々の流動を止めることはできなかった。ジンポー族はシャン族に南下を食い止められたので，パラウン族の居住領域に移り住んだと，地元の村人たちは信じている。ラフ族は19世紀後半になっても移動しており，リス族は1900年代にモゴックに流入した。アカ族，リス族などは南下をつづけ，1920年代にはタイにまで到達した。

さらに第二次世界大戦の破壊と虐殺によって，ますます民族流動を加速させ，現在でも続いている。また1949年に中国で共産党指導者たちが勝利したことで，数千人もの中国国民党の兵士が，中国雲南省からビルマのシャン州へと流入し，散り散りに山岳地方へと逃げ込んだ。それでも，

最大の民族移動は，ビルマの先住民によって国内で生じている。

1948 年の独立に際し，ビルマは政治的統合の問題に直面し，未だに解決されていない。国内では暴動が勃発し，カレン族，モン族，カレンニー族，パオ族，ラカイン族，シャン族，カチン族，チン族，カヤン族，ナガ族，ラフ族，ロヒンギャ族，ムスリム，パラウン族，ワ族などの多種多様の民族集団を巻き込み，1990 年代に入ってもまだ紛争が続いている。ビルマの少数民族は武装するようになり，何十年にもわたる民族間の闘争や政治的圧力，生命剝奪，強制退去が横行している。

その結果，多くの独自の文化が絶滅の危機に瀕している。おそらく数年で，カレン族やワ族といった小規模の民族集団は，完全に消失するか，あるいは，もっと大きな勢力であるダヌ族に吸収されていくだろう。そのダヌ族も，ビルマ族やシャン族に徐々に吸収されている。

ビルマ国内の社会集団は武装するようになった。道路や山腹に軍の検問所が散在し，何十万人もの少数民族が政府の定めた地域に強制的に移動させられた。反政府組織を弾圧するために中央政府は「4 つの遮断（フォー・カット）」を実行したため，多くの住民が近隣諸国へと逃走した。現在では，難民や不法入国者として 50 万人以上（主にカレン族，カレンニー族，モン族，シャン族）がタイに，数万人のイスラム教徒がバングラディッシュに，そしてチン族がインドで生活している。

こうした大変動のため，ビルマの各民族の人口に関する信頼できる統計や分析は皆無である。およそビルマの人口 4,800 万人のうち，3 分の 2 がビルマ族かビルマ語を話す部族で，残りは独自の言語，支族，文化を有する 6 つか 7 つの主要なグループに分けられる。

最も大きい少数民族はシャン族とカレン族でそれぞれ 8 〜10 パーセントを占め，モン族は 3 パーセント，チン族とカチン族は 2 〜 3 パーセント，パラウン族とワ族は 1 パーセントであるが，こうした数字は大まかな統計である。多数のインドや中国の少数民族も，ビルマ国内に散在している。

平地には集落が増え続け，年々都市の規模が増加している。こうした状況は少数民族にも影響を与えている。モン族とラカイン族は，大多数を占めるビルマ族と同じように水稲を栽培している。しかし，山岳地方では今でも，少数民族が移動式の焼畑農業を営んでいる。森林のごく小さな領域を焼き払い，米，とうもろこしなどの穀物を数年間栽培し，土地が痩せてくると再び耕作できるようになるまで，別の土地へと移動する。10 年から 15 年で輪作する民族もいれば，村ごと別の土地に移る民族もいる。山岳地域では採取できない塩，金属製品などは，市場で農作物や木工製品と交換する。ビルマ北東部のシャン市場は，多くの多様な山岳民族と遭遇できる絶好の場所である。市場は 5 日ごとに場所を変える。例えば，ヘロからタウンジー，東のカロー，そしてインレー湖の北東にあるピンダヤへと移動する。

複雑に民族が入り混じった状態を説明する適切な言葉を見つけることは，部外者の書き手には非常に難しい。「人種」「少数民族」「国籍」「先住民」「部族」といった言葉がよく用いられる。本書では，今日のビルマにおいて「伝統的」あるいは「部族特有」と考えられている人類学的影響

や文化に焦点を合わせている。しかし，民族学者にとってビルマは格好の研究対象だったにも関わらず，1950年代初期のエドムンド・リーチの先駆的な研究以降，際立った研究の進展が見られない。

そのため，本書では少数民族を州や地域によって分類した。ビルマの多様な民族や支族を分類する統一基準がない現状では，この方法が最も適切だと思われる。言語によって分類する学者も大勢いるが，確立した方法とは言い難い状況にある。多くの場合，近隣の部族が使用する言語を取り入れたり，あるいは独自の言語が完全に消失しているのが現状である。

少数民族の中には，大規模な集団を形成し，国境付近の人々との接触を続けている民族もいれば，孤立した環境で生存している少数民族，あるいは大きな集団に同化してしまった民族もある。カチン州の特徴として，異なる氏族が非常に近接して居住しているため，状況がさらに複雑になっている点が挙げられる。プタオ北方のヌン-ラワン族は多くの派生言語を話し，やがて南方のマル族の言語に同化していった。ラシ族の言語はマル族の言語の方言であり，アジ族はマル族とジンポー族の間の言語を話す。

衣装だけでは明確な分類基準にはならないが，少数民族にはそれぞれ独自の民族衣装があり，特に女性の衣装は特徴的である。パラウン族やアカ族は，未婚と既婚の女性を明確に区別する。衣装から，属している少数民族や支族が判別できるが，結婚によって属する集団が変わる場合もある。ワ族の女性がシャン族と結婚すると，シャン族の衣装と言語を使用するようになる。男性の衣装は，近年著しく変化している。これは，多くの男性が取引や商売に従事し，必然的に居住地を離れて移動する機会が多く，一方，女性は村に留まり，家事に従事していることが理由として挙げられる。

こうした状況から，ビルマの多様な少数民族は，独自の言語，文化，芸術を21世紀に入る頃までは保有しているだろう。ジェームズ・ジョージ・スコット氏，コロネル・ジェームズ・ヘンリー・グリーン氏が撮影した写真と見比べてみると，この100年間であまり変化していないことがはっきりとわかる。リチャード・ディランがビルマの少数民族について記述した本書は，民族学的研究に貢献しているだけでなく，人々の自尊心や威厳に対して，我々の関心を喚起し，理解を深める一助になるだろう。

カ チ ン 州

カチン州は，ビルマ北端の州であり，北西をインド，北方をチベット，東方を中国と接している。ビルマの最高峰であるカカボラジ山（19,294フィート）は，カチン州とチベットとの国境付近に位置する。イギリスの統治下時代においても，カチン州の多くの地域では，長年にわたってその支配力は浸透しなかった。それは，この地域がインドや中国の民族自治地域と国境を介して接しているためである。

1961年にカチン州で勃発した内戦は33年間にも及び，少数民族の社会に大きな打撃を与えた。

ジンポー族，マル族などの民族集団は，暮らしていた村から連れ去られ，あるいは荷物運搬係として徴集され，その後内戦で殺害された。一般市民の犠牲者だけで 30,000 人を超えると見られている。その後，1994 年にカチン独立機構（KIO）とビルマ連邦政府が停戦協定を結ぶと，カチン州の故郷に村人が帰ってきるようになり，活気を取り戻し始めた。

カチン族はインド北東部や中国にも居住しており，シャン州北部には 10 万人以上が暮らしている。一般的に，カチン族はチベット・ビルマ語族の中では最近になってからビルマ国内に流入してきたと考えられている。

1931 年にイギリスが行なった人口調査によると，カチン族は現在のカチン州一帯の人口の半数を占めていた。カチン族の中で最も人口の多いサブ・グループは，ジンポー族と，ジンポー族と関係の深いハク族である。ハク族の「ハク」とは「川の上流の人々」を意味し，主にサムプラブム川とマカリ川の間の北部三角地帯に居住している。それとは対照的に，ジンポー族はチンドウィン川とイラワジ川（エーヤワディー川）流域の，より広大な南部地方で生活している。

カチン族で二番目に多いサブ・グループは，マル族，ラシ族，アヅィ族であり，彼らの文化はジンポー族とほとんど区別できないほど類似している。また，彼らはジンポー語も話す。そのため，ジンポー語がビルマの推定 150 万人のカチン族の共通語になっている。マル族とラシ族の居住領域は広範に及ぶが，多くは中国とビルマの境界領域，特に三角地帯とンマイカ川流域で生活している。

カチン族三番目サブ・グループはナン族とラワン族で，総称してナン・ラワン族と呼ばれ，北部プタオ周辺に居住している。ラワン族の石弓を用いた狩猟技術は有名であるが，人里離れた山奥に暮らす彼らの詳細については，ほとんど調査されていない。

最後にカチン族に含まれる民族集団として挙げられるのは，リス族である。どこの地域でも，リス族はたいてい他の民族集団あるいは単独に分類されるが，カチン州に居住しているリス族の言語や文化は，カチン族に近いものになっている。

イギリス統治時代，多くのカチン族はイギリス軍に参加し，その多くがキリスト教に改宗した。今日，カチン族の多くはバプテスト派であり，いくつかの地域ではカトリック教徒が豊かな社会を形成している。この一世紀の間に生じた変化によって，カチン族全体に独立主義の機運が高まっている。多くの家族や村人は，渓谷や町で暮らすようになって久しい。

しかし，山岳地方には，先祖代々伝わる精霊崇拝や農業を続けている地域が残っている。カチン族最大の民族集団であるジンポー族は，伝統的に山の尾根に村を構えてきた。村に入るには，祈りの木の傍らの印の付いている聖なる木 numshang を通らなければならない。こうした村では，ナッ神や精霊，特に大地の精霊を鎮静，崇拝するために神社に捧げものをする。

伝統的に，カチン族は農耕民族であり，米，とうもろこし，タバコ，野菜，時にはケシなどを栽培し，塩や日用品と交換する。シャン州では，谷床での栽培に適した水稲を栽培している地域もある。また家畜を飼い，魚を摂取して栄養を補い，12 月から 2 月の寒い季節には狩りを楽しむ。

男性は森を焼き払い，女性は畑の手入れをし，収穫し，脱穀する。また，水を汲み，薪を集め，機を織り，服を作るのも女性の仕事である。

興味深いことに，カチン族社会は，歴史的に二つの制度，グムサ（貴族）社会とグムラオ（庶民）社会に分かれていた。結婚，規則，宗教に関して，それぞれの社会独自のルールがあった。どちらの社会にも共通して，指導者と民間人が存在し，時代の変化に晒されていた。奴隷や農奴制度も今世紀まで存在していたが，グムサ・グムラオ制度と同様に，今日では廃止あるいは消滅している。

しかし，民族の支族集団と近年形成されたキリスト教徒であるカチン族による集団のどちらにも，複雑な部族制度は依然として残っている。イギリス人は，そうした部族を支族と取り違えた。実際，五大氏族 ── マリップ，ラパイ，ラタオ，ンクム，マラン ── がさらにいくつもの分家を形成している。カチン族の首長の先祖を辿っていくと，ニングワン・ワに行き着く。

シャン州

シャン州は，ビルマ北東部の広大な高原に位置し，ほぼイングランドとウェールズを合わせた面積を有する。シャン族の民族主義団体は，シャン州の推定人口600万人の半数以上をシャン族が占めていると主張している。その他，シャン州に居住している10万人以上の民族集団には，パラウン族，ワ族，カチン族，ダヌ族，ラフ族，アカ族，パオ族がいる。彼らは，それぞれ独自の文化と言語を持つ。

1287年にモンゴル人襲撃によってパガンが陥落するまで，シャン族は独自の王国の建立まであと一歩のところまできていたが，最終的には国内の対立集団に妨害され，建国には至らなかった。それでも，数世紀もの間，ビルマ王朝やモン王朝にとって脅威であったことには変わらない。1500年までに，それぞれの王が統治する30余りの領土が，現在のシャン州一帯に取り込まれた。

イギリスがビルマの辺境区域を間接統治していた時代，「シャン連邦州」には独自の領土の保有が認められていた30ほどの王族の支配領土があった。1948年に英国から独立した時に初めて，こうした領地の集合体が「シャン州」として統合され，ビルマ連邦に組み込まれた。

1947年に制定された憲法では，シャン族の領土保有の歴史から，10年後に独立する権利が保証された。王や伝統的な封建制度の継続も認められた。

イギリスから独立後すぐに，王の支配に反対する南西部の山地民パオ族が暴動を起こした。

1958年から1959年にかけて，ネウィン将軍は王たちにそれまで引き継いできた権利を放棄するよう迫った。こうした動きはシャン族の若い民族主義者たちを地下抵抗運動へと参入させただけだった。1962年3月にネウィン将軍が軍事クーデターを起こしてから数年間，シャン州ではあらゆる民族集団に反政府運動が広がったと言っても過言ではない。大きな暴動がシャン州東部でも勃発した。1968年に侵略を開始した中国の後ろ盾を得たビルマ共産党（CPB）が，台頭してきたためである。

1970 年代から 80 年代にかけて，シャン族，パラウン族，カチン族，パオ族，ラフ族，カヤン族，ワ族が独自の「開放地区」を山岳地帯に設立すると，ビルマ共産党（CPB）の圧力を受け，共産党推進派と反共産党派に分裂した。こうした内戦はシャン州の人々に悲劇をもたらした。あらゆる民族集団から徴集された，何万人もの村人や兵士が死亡した。

国際奴隷制度反対機構によると，かつて繁栄していた村がビルマ国軍に一掃され，山奥へと逃げ込むことを余儀なくされた。そこではアヘンが唯一の換金作物であった。

1989 年，ビルマ共産党（CPB）が崩壊し，ワ族が率いる 5 つの少数民族の武装組織に再編成された。国家法秩序回復評議会（SLORC）との停戦協定が結ばれ，それに続いて，他の対立民族武装集団とも休戦した。その中には，麻薬王クン・サ率いるモン・タイ軍も含まれていた。しかし停戦は長くは続かず，シャン州の政治状況は未だに混沌としている。

シャン州では，多勢のシャン族の文化や言語が優勢な状態が続いている。ビルマ国内では，ビルマ族に次いで二番目に人口の多い民族集団である。タイ人の民族集団の一派であるシャン族は，同時期に中国南西部の雲南省から東南アジアへ移住した，タイのシャム人やラオスのラオ族と関係が深い。多くのシャン族が，カチン州やビルマ北部でも生活しており，フーコン渓谷からアッサムにかけて広範囲に暮らしている。

主に渓谷で生活しながら，シャン族は伝統的に商人であり，水稲を栽培してきた。芸術的な漆器や工芸品でも広く知られている。伝統的に，シャン州を構成する下部社会は王の支配下にあり，王に指名された村の指導者が領土を管理している。農民とその子孫は賃貸料と税金を王に収めていれば，その土地を所有する権利を有する。王のほとんどはシャン族であるが，この統治制度は広く模倣され，数世紀を経て，パオ族やパラウン族も同じような社会制度をつくりあげた。

政治的に不安定な状態が続いたこの 50 年間で，社会は大きく変化した。かつての伝統的なシャン族社会は，貴族社会と庶民社会に分かれていて，下層階級の人々は，漁師，肉屋といった仏教徒が「不浄」と見なす職業に就いていた。そうした人々の多くが庶民となり，さらには貴族だった人とも結婚が認められるようになってきた。封建社会の身分や領土の定義が流動的な時代であった。

結婚式は，多くの友人や親族の立会いの下，花嫁の家で行われ，村の長老が新郎新婦の手首に白い紐を結ぶと，次に二人は新郎の両親の家へと連れて行かれる。

シャン州では上座部仏教が信仰されているが，シャン州東北部と南部では，祈祷，星占い，夢占いなどのオカルト的儀式が依然として残っている。

入れ墨もまた，シャン族の少年にとって，成人として認められるための重要な儀式である。足，胸，背中，腕には，悪魔から身を守ると信じられている，宗教的な模様の入れ墨が彫られる。こうした風習は，ここ数十年続いている闘争で戦っている兵士にも根強く残っている。

シャン州のごく少数の民族集団であるヤオ族（あるいはマン族，ミェン族）は，中国南部が本来の居住地であったとする歴史学者もいる。ヤオ族は 12 世紀から 13 世紀にかけて中国湖南省か

ら東南アジア各地，タイ，ベトナム，ラオスに広く分布し，そこからさらにビルマにまでやってきたと信じられている。1950年代，東南アジアには80万人のヤオ語を話す人々がいると推定され，その内の66万人は中国本土にいる。ヤオ族は，ヤオ語に類似している言語を有するモン族と関係があり，シナ・チベット語族に分類されている。

こうしたヤオ族の離散の歴史は，ヤオ族が異なる農業形態に適応せざるを得ない状況を生み出した。多くのヤオ族は，高地の，モン族やリス族よりは標高の低い領域で，焼畑農業を営んでいる。このため，歴史的にヤオ族の方が，平野の商人や伝道師に接する機会が多くあった。

ヤオ族は家畜を飼い，特に豚は，塩や金属製品と交換するのに用いられる。鍛冶屋や銀細工師として有名であり，上質な紙もつくる。こうした技術は中国人やタイ人から習得したのだろう。彼らはまた酒も醸造し，ケシを栽培しているが，大酒飲みでもなく，ほかの民族のようにアヘン中毒者もほとんどいない。嗜好品として，茶やタバコの方が好まれる。

東南アジアにはキリスト教に改宗した者もいるが,伝統的な社会では今でも祖先信仰が行われ，祈祷師は人々から尊重されている。収穫時期の重要な祭りを取り仕切ったり，病気になると悪魔祓いの祈祷をしたり，鳥の骨と竹の棒で村人の災いを預言する。怪しげな中国語で書かれた詠唱の書も所有している。裕福なヤオ族の家庭の息子は，詠唱を教えられ，成長して祈祷師になることもある。

モン族の初期の歴史や移住についての情報はほとんどない。ミャオ族あるいはメオ族としても知られ，シナ・チベット語族に属する。ベトナム語の「マンメオ」から由来したとする学説もある。「マン」という言葉は，タイを除いた中国南部の漢族以外の民族を表すのに初期の中国人歴史家によって用いられた。長江下流域や黄河流域に移り住むようになった先秦時代に，中国人は民俗学的に異なる集団であると認識していた。

しかし，中国人から弾圧され，モン族は中国雲南省，ベトナム，ラオス，タイ，ビルマ東部の国境周辺へと離散した。モン族の文化には，中国人，ロト族，タイ族，ヤオ族などの他民族文化の融合が認められ，東南アジアで最も繁栄している山地民である。移住の歴史によって適応力が高められ，中国語を駆使して商人として成功できたという一面もある。

今日，モン族は，衣装や言語の特性から，いくつかのサブ・グループに分類される。青モン族の女性は，紡いだ麻を織り，藍で染めてスカートをつくる。白モン族の女性は，ズボンの上に長い装飾を施したエプロンをする。リス族同様，モン族もこの地域のケシ栽培を担っている。かつて，ケシは富を生み出した。今日でも，結婚費用を賄い，一家族上養える財力のある男性の中には，複数の妻を有している者もいる。

モン族の村には，シャーマンがいる。男性の場合も女性の場合もある。シャーマンの儀礼は神聖なものとして崇められ，中央アジアを起源とし，中国の道教との関連性が窺われる。赤ん坊は生後三日まで精霊界の一部であるという迷信を未だに信じている地域では，三日後に再び精霊が赤ん坊に宿ることを祈願して，鶏が貢物として捧げられ，それから名前が付けられる。

モン族の求婚の儀式も興味深い。儀式は1月に行われ，16歳前後の男女が向かい合って二列に並ぶ。それぞれが，気に入った少年あるいは少女に綿のボールを投げる。相手がボールを受け取れば，縁談成立である。ボールが受け取られなかった場合は，銀や服を相手にプレゼントしなければならない。こうすることで，出会いの機会が増えるのである。

シャン州の少数民族には，中国人もいる。民族の起源が異なる中国人は，何世紀にもわたってこの地方に移住してきた。シャン州北部のコーカン地区の住居者は，ほとんどが中国人である。

特徴的な民族集団として，パンゼー族が挙げられる。イギリス統治時代にパンゼー族と呼ばれたが，自称はフイフイである。パンゼー族は，他民族集団の周辺に居住していることが多く，中国人イスラム教徒である。隊商のラバ追いとして，中国とビルマを行き来するようになった。

パンゼー族は，13世紀から14世紀に中国へ移り住んだペルシャ人，アラブ人，中央アジアのイスラム教徒の商人を先祖に持つ，混血民族であると考えられている。中国から遥か南方のラングーンやモールメインにまで往来する隊商の運搬係として知られるようになった。彼らは商人として生計を立て，奴隷に家事をさせていたとも言われている。

リス族は，ラフ族やアカ族と同じように，チベット・ビルマ語族である。しかし，多くのリス族男性は，雲南語，シャン語，ジンポー語を話す。リス族は，中国雲南省の北東地域が起源であり，中国人との類似性が多く認められると言う人類学者もいる。何世紀にもわたって，リス族は南方のビルマやタイへと離散し，多くはシャン州のサルウィン地方やカチン州の山岳地方に散在している。

カチン州では，カチン族との接触機会が多いこともあり，リス族はカチン族の一族であるとされ，民族間結婚している人も多い。歴史的に，リス族は中国人から「イ族」と呼ばれていた。その後カチン族から「ヤォイン」と呼ばれるようになった。イギリス政府もまたリス族を「ヤォイン」とも呼び，ビルマに関する報告書や，イギリスに加勢して参加した第一次世界大戦の記録にも明記されている。

リス族の村は，たいてい標高9,000フィート以上の高い尾根や山頂にある。防備が容易な人里離れた場所を好み，竹林の奥深くに住んでいる。家畜も飼っているが，基本的には農耕民族であり，米，ソバ，野菜，そしてケシを栽培している。黄金の三角地帯で大量のケシを栽培しているにもかかわらず，アヘン中毒者は少ない。薬としては使用している。

リス族はシャン州の市場を転々としている。竹製品，籠，織物の他に，ケシ，薪，薬草を売っている。歴史的に，中国雲南省の商人と山岳民族との仲買人の役割を果たしてきた。

リス族は，大洪水で生き延びた唯一の民族であり，東南アジアの山岳地方で生活しているリス族の支族は，その時に生き残った兄弟姉妹の子孫であると信じている。こうした地域では，世襲した首長がいくつかのリス族の村を治めており，法を定め，犯罪を裁く。

シャン州のリス族は，キリスト教徒や仏教徒とほとんど接触する機会がなかったように思える。しかし，この地域の宗教には，道教の要素が含まれており，森，風，大地，空，村，穀物の精霊

を拝む自然崇拝や祖先崇拝が行われている。各村には医者がいて，邪悪な精霊に取り付かれて病気になった人を治す。精霊界との仲介者として振る舞い，祈り，貢物，おまじないによって悪霊を取り除く。

毎年春には，盛大に祭りが催される。村人は最大6日間，先祖を奉り，親戚の墓参りをする。また，この祭りは若い男女の出会いの場でもあり，このあと結婚する者もいる。

パラウン族は，主にシャン州北東部に住んでいる。モン・クメール語族に属し，ビルマ族，シャン族，カチン族よりも先に，ビルマに居住した最初の民族であるとされている。ビルマ人はパラウン族と呼ぶが，自称はタアンである。カチン州南部や中国雲南省にも散在している。

パラウン族の村は小規模で，標高6,000フィート以上の高地の山頂や尾根に築かれ，渓谷によって互いに隔離されている。伝統的な長屋と急斜面での茶の生産で知られている。収穫期には，村中総動員で茶摘みと加工作業に取り掛かる。米，豆，麻，ヤムイモ，唐辛子，甘蔗なども栽培している。男女ともにタバコを吸い，ビンロウの実を噛む。けれども，茶は男性の飲み物とされている。

パラウン族は，塩漬けや乾燥した茶や家畜を，銀の装飾品，衣服，灯油，塩，ビンロウの実，魚，牛乳などと交換する。こうした取引は，パラウン族の村の市場やシャン州の街，さらには遠く離れたマンダレーやラングーンで行われる。衣服や籠などの手工芸品は提供しない。

イギリスから独立して間もないころのパラウン族の社会構造は，シャン族と同じように，世襲の王の支配下にあった。多くの地域ではシャン族の王が村を治めていたが，タウンペンはパラウン族によって統治された。

ネウィン将軍が軍事クーデターを起こした1962年から停戦合意した1991年まで，数え切れないほどの破壊行為が繰り返され，多くの人命が失われた。しかし，多くの村は今でも，伝統的に村人を支配してきた首長に従う指導者によって統制されている。首長が重大な問題に取り掛かっている間，指導者は他の問題を処理する。貧富は村での地位によって決まる。茶摘みをして賃金を貰う使用人の方が，その土地の所有者よりも低いとされている。また，魔女の記録も残っている。魔力は，村の別の場所に住んでいる母親から受け継がれると考えられている。

求愛は茶畑での収穫中，あるいは若者が少女の家の床穴から寝室に潜り込んで行われる。若者は，少年たちの学校でもある村の寺院によく集まる。パラウン族は仏教徒であり，伝説によると，上座部仏教は1780年頃ビルマの王たちの強い要望で導入された。シャン族が仏教を知るようになるずっと以前のことだった。

パラウン族の儀式には，仏教に関連したもの多いが，毎年九月には精霊祭も開催する。二種類の精霊，死後一週間ほど経った動物や人間の精霊カルブと植物や無生物の精霊カルナムを信仰している。人には二種類の守護神が付いていて，家，村，道路，茶などなどの精霊がある。

シャン州では，シャン族に次いで人口が多いのは，パオ族である。パオ族はカレン族に属し，シャン州南西部のタウンジー周辺に多く居住している。ビルマ人は，パオ族のことをビルマ語で

「山岳民族」という意味のトンスー族と呼ぶ。パオ族は，およそ 70,000 にも細分化され，下ビルマのタトン地方南部に暮らしているため，その起源ははっきりとわかっていない。こうした状況から，パオ族は 900 年程前に北方へと移住し始め，1057 年にパガン王朝のアノーヤター王が，モン族の国タトンを征服したと考えられている。下ビルマのモン族と同じように，パオ族も仏教徒として長い歴史を持っている。

シャン州におけるパオ族の居住地は，山，疎林，低地が入り組んでおり，そこで米，野菜，果物を栽培している。現金収入を支えている作物は，ビルマの葉巻煙草チェルートに使われるコーディアの木の葉である。狩猟は，食料確保と娯楽の目的で行われ，槍，石弓，罠，網などが用いられる。活発な商売活動から，かつてパオ族社会は繁栄していた。しかし，シャン族や地元の山岳民族と同様，1949 年にこの地方で起きた内戦によって，多くのパオ族の生活は大打撃を受けた。パオ族の指導者は，今でもパオ族自治区あるいは独立国建立の夢を抱いている。さらに，1990 年代初頭にパオ族の武装勢力が国家法秩序回復評議会（SLORC）と停戦したことから，パオ族の独立要求はラングーンで議論されるようになった。

パオ族の村は，壮大な木造建築の寺院でよく知られている。多くの仏教の儀式が日常生活に浸透している。しかし，ビルマ国内の他の仏教徒や民族集団と同じように，パオ族の人々も，精霊ナッ信仰者でもある。木や家に宿っている精霊を信仰し，村の外れや祈祷を行う仏塔の傍には，ナッ神を祀る神社がある。

インレー湖より上方の山岳地域は，タウンヨー族の居住地である。彼らの歴史的記録はほとんどないが，パオ族同様，何世紀も前に下ビルマからこの山岳地域に避難してきたか，あるいは捕虜としてシャン州に連れてこられ，現地の女性と結婚したと考えられている。言語学者によると，タウンヨー族は，ビルマ語のラカイン方言とよく似た言語を話すとされているが，タウンヨー族自身は異議を唱えている。非常に人口の少ないタウンヨー族の衣装は，シャン族やパオ族のものとよく似ているが，タウンヨー族の女性は膝下にリングをつけているのが特徴である。

イギリスの偉大な冒険家であり行政官であった J.G. スコット卿の時代以降，リアン族の記録はほとんどない。シャン州のいくつかの孤立した山岳地帯で暮らしているリアン族は，独自の言語とシャン語を話す。シャン族は，リアン族の主要三部族をヤン・ラム，ヤン・セク，ヤン・ワンクンと呼び，リアン族はこうした名称を用いて自称するようになってきている。ビルマ人はリアン族をイン族と呼び，衣装の違いからイネット（黒リアン族）とインセット（縞リアン族）の二つに分ける。

リアン族の三部族は，遥か昔の先祖の代からシャン州に居住していると信じているが，パラウン族やワ族との血縁関係を指摘する学者もいる。一方，ビルマ語のインという言葉は，カレン族を意味するようになってきている。

多くのリアン族は，近年急速にシャン族の衣服や習慣を取り入れるようになった。しかし，ヤン・ワンクンもヤン・セクも，伝統的な祈りの舞踊を祭りで熱狂的に踊る。他のいくつかの民族

集団とは違い，伝統的なリードパイプの奏でる音楽に合わせて，男女とも歌いながら踊りに参加する。

リアン族居住地域の南東にあるチェントン周辺には，アカ族が住んでいる。アカ族は，中国南部の雲南省を起源としながら，何世紀もかけて南方に移住した，ラフ族やリス族と同じチベット・ビルマ語族に属する。アカ族は，中国雲南省，ラオス，タイ北部にも居住している。こうした地方では，アカ族の文化の研究が進んでいる。アカ族は，祖先アカ族の兄弟から，7から9の部族に分かれたとされている。

アカ族は，平原の上方にある山岳地帯，モン族，リス族，ラフ族よりも標高の低い地域に住む。山腹に突き出た支柱の上に家を建てる。アカ族は水の精霊を恐れ，村を川から離れた場所に築き，竹製の管を利用して水を引く。焼畑農業を営み，伝統的に5年から10年ごと，あるいは土地が痩せたら，村ごと移動する。

アカ族の神話によると，人間と精霊はかつて仲良く暮らしていた。昼間は人間が，夜は精霊が畑を耕した。精霊が人間から卵を盗み，人間は精霊からきゅうりを盗んだことから問題が生じた。そのため，アカ族は村の入口に精霊の門を建て，人間と精霊の領域を区切った。

そうした門の傍には，ふくよかな男女の木像があり，人間の住居に近付こうとする森の精霊を牽制している。精霊の門の支柱の周囲には，輪にした竹を繋げて掛けてあり，そこには邪悪な精霊を払いのけるための竹の板が下がっている。

旅行者は，アカ族の精霊の門に手を触れてはいけない。部外者の接触から清めるための儀式が必要となってしまう。アカ族は，森に入ると極度に不安を感じる。森では精霊が優勢だと信じている。村に帰るときには，精霊の門を通って，森で遭遇した精霊を払ってから村に入る。

アカ族は，農業を営むだけでなく，牛，水牛，馬などの家畜を飼い，それらを売って現金を得る。ケシは現金収入のための重要な作物であり，山岳地方では手に入らない物と交換する。銀製品の多くは，渓谷に居住しているシャン族や中国人などから手に入れている。

近年になって，アカ族社会はますます貧困に陥っている。アカ族にはアヘン中毒者が多く，借金がかさむと子どもを売ってしまう者もいる。1980年代後半から，多くの若いアカ族の女性は，隣国のタイに出稼ぎ目的で移住している。タイでは，風俗関係者のHIV感染率が増加している。

ビルマのアカ族は，毎年，収穫と新年を迎える祭りを祝う。その他にも，三日間の祭り期間には，様々な儀式が執り行われる。あらゆる邪悪な精霊を村から取り除くために，動物が生贄として捧げられ，他にも儀式が行われる。

こうした祭りは若い男女の出会いの場でもある。また，若いアカ族の男女は，村の広場で自由に出会うことができる。アカ族はわりと若年のうちから性交渉を経験する。若いカップルはよく夜の森へと消えていく。男女ともに性交渉には開放的であり，出産を経験した女性はより情熱的になる。カップルが結婚を決めると，婚費が払われ，結婚を祝う。そこでは，結婚生活を始める二人を祝って，友人が新郎新婦の顔に鍋底の炭を塗り，泥を投げつける儀式が伝統的に行われて

いる。

アカ族が亡くなると，一本の大木が切り倒され，両端に羽の付いた舟形にくりぬかれ，棺となる。もう一本の木も倒され，棺にぴったり合う蓋が作られる。棺の準備ができると，亡き人の家から運び出され，村中の人たちが酒をふりかける。それから，遺体を棺に収め，黒い埋葬布と赤い布で覆い，故人の家系が初めて名前と一緒に唱えられる。数日後に，埋葬される。

日常会話では，アカ族はけっして本名を口にしない。名前には神秘な力があると信じているからだ。もし精霊が名前を聞いたら，アカ族を支配してしまうと思っている。

ラフ族はチベット・ビルマ語族に属し，おそらくチベットかチベットとの境界付近が起源だと考えられている。アカ族やリス族と同じように，ラフ族はイ人（ロロ族）を先祖に持つと信じている。ビルマには推定 15 万人ほどのラフ族が，主にシャン州南東部のチェントン周辺にアカ族と近接して暮らしている。近年，ラフ族はビルマからラオスやタイへと移住し，標高 4,000 フィート以上の山岳地帯に居住地を広げている。

ラフ族の中には，イラワジ川流域から祖先がやって来たと信じている者もいるが，外見や習慣からチベットが起源だと考えられている。中国人はローヘイ，あるいはタイ語でムソー（狩人）と呼ぶ。狩人や戦士としての並外れた能力を評した呼び名である。雲南省の中国人などの外部からの侵入者との長い戦いの歴史がある。今日でも，ラフ族の男性は，「優秀な狩人」という社会的地位の高い称号をめぐって競い合う。

ラフ族はいくつかの支族に分けられる。ラフ・ナ（黒ラフ族）は主にビルマや中国雲南省に住んでいる。ラフ・ニ（南方ラフ族あるいは赤ラフ族）は，ビルマやタイのラフ・ナの分派である。ラフ・シ（黄ラフ族）も，ビルマ，中国雲南省，タイに居住している。多様な部族はそれぞれ独自の方言や衣服の様式を持っているが，宗教観や居住様式に共通点が見られる。

ラフ族は，主に焼畑農業で生計を立て，米，野菜，唐辛子を栽培している。ビルマでは，ケシの栽培にも関わっており，自分たちの使用のため，あるいは塩や金属製品との交換に用いる。取引相手はリス族，アカ族，ワ族であるが，ラフ族はビルマ語やシャン語をほとんど話せない。それとは対照的に，他の民族集団の多くは，南方の山岳地帯で取引をするために，共通言語としてラフ語を話す。

ラフ族の村では，伝統的に祈祷師シャーマンの助けを借りて，首長が村を収める。祈祷師が，広域に影響を与える村の指導者として，選出されている村もある。チェントン周辺の強力な祈祷師が，敵を破壊できる魔法のナイフとロープとハンマーを持っていると言うと，タイにいたラフ族はビルマに戻ったという言い伝えもある。

ポと呼ばれる個々の戦士が悪事を働くと，罰や罰金が課せられる。重大な場合は占いで，腕の切断から死刑まで，幅広い量刑が下される。さらに山奥の村では，悪魔の精霊が取り付いていると判断されると，村から追放される。

多くの伝統的な習慣を未だに保持しているにもかかわらず，村の首長の命令で，村民全員がキ

リスト教に改宗した村がいくつかある。20世紀に入ると，アメリカ人伝道師ウィリアム・H・ヤングが，ラフ族を説教するためにバプテスト派の集会をチェントンで初めて行なった。

その昔，ラフ族の預言者は弟子たちに，白馬に乗った白人が聖書を携えて現れると語ったらしい。伝道師ヤングが聖書を携えてシャン州に馬でやってきたとき，ラフ族は彼こそが神であると信じ，何千人も洗礼を受けるために訪ねてきたと言われている。1932年に彼は隠退したが，息子のハロルド・ヤングはさらに数千人ものラフ族を改宗させ，1935年にはワ族の地域でも新たに伝道活動を始めた。1950年までに，ビルマ北東部にいるおよそ6万6千人のラフ族のうち2万8千人ほどがキリスト教に改宗した。

こうした祈祷師とキリスト教の影響を受けて，グーシャ教が生じた。信者は「人の姿をした神」である預言者の力を信じている。実際，1972年にラフ族とビルマ政府との対立が起きると預言したのは，一人の高齢の首長であり預言者だった。それ以降，何十ものラフ族の村が移転されたり，破壊されたりした。1990年代になっても，モン・サット地方の山岳地帯では闘争が続いている。

インダー族は，シャン州南東部のインレー湖周辺に暮らしている。タウンヨー族と同じように，チベット・ビルマ語族であるが，ビルマ語に近い方言を話す。そのため，モン族とタボイのビルマ族との戦いでビルマ王朝に連行された捕虜の子孫，あるいはパガン王朝の君主ナラパティシードゥーの時代（1174-1210）に北部へ移住した南部ビルマ人の子孫であるとする歴史学者もいる。大半は仏教徒であり，今日ではビルマ人と同じ衣装 ── ロンジーと開襟シャツやブラウスを着る。

シャン州にたどり着いたインダー族は，すでにその地に住んでいた先住民族に追いやられ，湖のほとりに移住したようだ。そこで，独特な農業や漁業を発達させた。インダー族は「湖の人」という意味があり，浅瀬の水面に浮かべた土台に家を建て，ホテイアオイを編み込んで作った30フィートにも及ぶ長い浮き籠に肥沃な土を満たし，野菜や花を栽培する。こうした肥沃な土壌を積んだ浮き床は碇で固定されることなく，カヌーと同じように櫂をこいで湖を自由に移動できる。

インダー族は，織物でも知られているが，一本足で櫂を漕ぐ独特な操法で有名である。細長い舟に立ち，片手で持っている櫂に片足を巻きつけ，もう片方の足でバランスをとりながら，舟を進ませる。そうして自由になった手で円錐形の魚籠を持って水中の魚を捕まえる。

ワ　副　州

ワ族は，モン・ルメール語族に属し，中国と国境を接するシャン州東部の半自治領域に居住している。ビルマにはおよそ30万人のワ族がいる。ビルマ，中国，タイとの国境付近の山岳地帯の荒野には，200万人以上のワ族とワ族に近い関係にあるパラウン族がいる。ワ族はこの地域の最古の先住民であり，伝説によると，歴史が始まって以来この地に住んでいるらしい。

ワ族という名称は，シャン族が使い始め，次第にワ族も使うようになったと考えられている。シャン族とイギリス人は，ワ族を「未開のワ族」と，仏教に改宗した「従順なワ族」に分けた。シャン州では，リアン族やパラウン族など非常に多くの人が，ワ語系の言語を話す。何世紀もの

間，ワ族の文化は，シャン族や他の少数民族と同化してきたと信じられている。多くの村では，ワ族の首長はシャン族の王制を模倣している。

「未開のワ族」は，サロウィン川とメコン川に挟まれた中国との国境に沿って南北 150 マイルの山岳地帯に居住している。このあたりは，イギリスも中国も統治できなかった難攻不落の地域である。しかし，この領域の外側にも多くのワ族の集落があり，とくにチェントンに多く見られる。関係の近いラワ族の村も，タイとの国境付近に残っている。

ワ族は，標高 2,000 から 5,000 フィートもの深い溪谷のある山岳地帯に住んでいる。熱病の原因となる川から離れた，高い山腹に村を築いた。水は，竹で作った導管を通して，村に引いている。村には 300 戸ほどの家があり，伝統的にとげの生えた低木や藪で覆われた 6 フィートほどの高さの塁壁で守られている。外部からの侵入に備えて，村の外側には，人目につかない溝が掘られていることが多い。村に入るには，村のすぐ傍にある，重たい木の戸で閉ざされている細長いトンネルを通らなければならない。

広域に及ぶ耕作が，この地域に不毛な土地を生み出した。ワ族は食料確保のために狩猟や漁をしなければならないこともよくある。彼らはまた，家畜を飼い，作物を栽培する。ケシは主な現金収入作物である。ケシは食料や金属と換える。こうして手に入れた金属から銃，火薬，鉛弾を作る者もいる。

中国と国境を接していることから，1968 年から 1989 年まで，ワ族は中国からシャン州へと侵略したビルマ共産党の影響下にあった。その約 20 年間に，激しい闘争がこの山岳地帯で繰り広げられ，2 万人以上のワ族が死亡したと報告されている。しかし，1989 年に現地のワ族が暴動を起こして，ビルマ共産党の支配を打ち破り，新たに組織されたワ州連合軍がこの地域の統治権を握り，その後ラングーンの国家法秩序回復評議会との停戦に同意した。

それでもなお，ワ族の生活している山岳地帯の大部分では，旅行者の立ち入りが禁止されている。最大の理由は，アヘン取引である。この地域には，シャン族や中国人が散在しており，中国人はアヘン取引の仲介役だった。しかし，ワ族は，最近になってワ軍が進展した南方に住んでいるラフ族以外の民族集団とは，あまり接触を持たない。

歴史的にも，ワ族は孤立していた。その最たる理由は，「首狩り」という恐るべき慣習にある。豊作祈願の儀式として，最近まで実施されていた。わずか 20 年程前，犠牲となった頭のない遺体が，ワ族の集落の周辺で確認された。実際，チェントンへ向かう途中のある村では，300 もの人間の頭蓋骨が道路脇に並べられていたと言われる。

かつて，ワ族は，首狩り以外に村を離れることはほとんどなかった。首狩りは，標的となる人間を探しに村から遠く離れた地まで探しに行く，少人数の部隊によって遂行される。新たに狩られた首は，長い棒の先に括りつけられた籠の中に入れられ，表面の肉が朽ち落ちるまで村に置かれる。いくつかの村では，20 ほどの首が籠に入った状態で置いてあった。その後，宗教的儀礼に則って，村の外の神聖なる林にある柱の窪みに首が並べられる。

首狩りの風習は，ワ族の神話に登場する，ワ族の伝説的な創始者の慣習から生じたと考えられている。頭部のない遺体は悪霊から守ってくれるとされ，家族が亡くなったり，作物が不作だったりすると，祖先を激怒させてしまうと信じている。

見知らぬ人の首は，特に喜ばれる。なぜなら，頭蓋骨のあたりを漂っている精霊は，地獄から抜け出す道がわからないので，遺骸から離れず留まっているからである。狩ったばかりの新鮮な首は，春の耕作の季節には特に重要である。

カヤー州

かつてカレンニー州と呼ばれていた現在のカヤー州には，10以上の民族集団が，ビルマ東部の険しい山岳地帯で生活している。北はシャン州，南東はカレン州，東はタイと接している。パダウン族，ブレ族，インバオ族，パク族，そして最大規模の民族集団であるカヤー族から成る。また，シャン族が暮らしている渓谷もある。

この地方のカレンニー族あるいは赤カレンと呼ばれる人々の文化は，概ねカレン系諸部族と同じである。カレンニー族の指導者は，別々の祖先から派生していると主張しているが，カレンニー族の独立性は，地元首長がシャン族の王政を模倣するようになった近年の習慣から起因しているとする学者もいる。こうした世襲の地位はビルマのミンドン王によって認知され，正式には1875年にイギリスがビルマを合併した時期に条約に明記された。その結果，カレンニー州はイギリス領ビルマには完全には組み込まれなかった。

1947年の憲法では，カレンニー州は，シャン州と同様に，十年後にビルマ連邦から脱退する権利が認められた。しかし，1948年8月，カレンニー族の指導者ウ・ビー・フツ・レが中央政府の兵士に暗殺され，武装蜂起がカレンニー州に広まり，現在も闘争が続いている。

こうした闘争の背景には，歴代の政府がカレンニー族の抗議を聞き入れてこなかったことが挙げられる。カレンニー州は，1951年にカヤー州と改名した。これには，共に自治の拡大を主張して戦ってきた，カレンニー族とカレンニー族に近い関係にあるカレン族と間に，亀裂を生じさせようという意図があったとする説もある。脱退の法的権利は，遂に1974年の憲法から削除された。

ビルマのあらゆる地域で，多くの民族集団はこの50年間に及ぶ戦闘に苦しめられてきた。村落ごと別の土地に移動させられ，政府の弾圧運動によって多数の山岳民族が強制退去させられた。政府軍は，兵士を増員して州全域に配属し，1990年代に過度の森林伐採で荒地にしたタイの伐採者に，広大な森林の中にタイへと続く行路を開拓させた。1994-5年に，国家法秩序回復評議会（SLORC）と民族集団の三つの主要な反政府組織は停戦に合意したが，状況は依然として不安定であり，多くの村人がタイへと流入している。タイの難民キャンプでは，１万２千人ものカレンニー族が生活している。

カヤー州の最大民族集団は，カヤー族である。ビルマにいる約15万人以上のカヤー族の大部分は，カヤー州にいる。スゴー，ポー，パオ族と同じように，カヤー族は，下ビルマやタイとの国

境付近にいるカレン族と同じ言語・文化を有する。頭に巻いている布やショールの特徴的な色使いから，カレンニー族は「赤カレン」と呼ばれるようになった。

山岳地帯に居住している他のカレン族と同様，カヤー族は焼畑農業を行い，狩猟や漁をして食料を得る。綿の布や林産物を食料，陶器，金属などと交換する。行商人が取引を仲介することもあるが，地元の市場でカヤー族の姿を見かけることも多い。この百年ほどで，多くのカヤー族が街へと移住している。

かつて，カヤー族は伝統的な精霊信仰者であったが，大勢がキリスト教，特にバピテスト教徒やカソリック教徒に改宗した。一年で最も重要な祭典である精霊祭は3月から5月の間に開催され，カヤー族だけでなく他のカレンニー族も，キリスト教徒であろうと仏教徒であろうと精霊信仰者であろうと，雨の精霊に敬意を表する。

ブレ族（コヨウ族）の歴史にまつわる記録はほとんどないが，カヤー族と関係が近い。最近まで，人里離れた森林の奥地に住む傾向があるのは，より勢力の強い民族集団の犠牲になったり，あるいは捕虜になった歴史からであるという説もある。近接して居住しているパダウン族と同じように，ブレ社会は母系社会であり，家系も女性を中心として捉える。

ブレ族の記録が残っている風習のひとつに，生後一年間，毎朝晩，赤ん坊を入浴させるというものがある。伝統的な村では，こうすることで一生分の洗浄を行えるとブレ族は考え，一年経つと，今度はさほど熱心に入浴を行わない。子供を命名するのは母親に託されており，母親は村の祈祷師の鳥の骨占いの結果から，男児なら祖父，女児なら祖母の名前を付けるかどうか決める。

パダウン族は，カヤー州とシャン州の国境付近の山岳地方に住んでいる。自称はカ・カウンで，カヤン語に属するとされているカレン語を話す。およそ5万人と人口が少ないにもかかわらず，ビルマの山岳民族の中で最も有名である。女性が首に特徴的な真鍮の輪を装着しているからである。この輪は，総重量が25ポンドに達することもあり，鎖骨と肩を押し下げ，首を長くすることから，「キリン女」あるいは「首長族」という俗称が付けられた。

一つ目の輪は，10歳になる前に装着する。村の医術師が，その儀式を執り行う縁起の良い日付を決める。当日，夜が明けると，少女の首を数時間かけてマッサージし，犬の脂，ココナツミルク，ロイヤルゼリーから作られたと言われる軟膏を擦り込み，高さ4インチほどの最初の輪を装着する。毎年一つずつ輪が増やされ，婚礼期に達するまで続けられる。伝統的に，両手足にも輪を装着する。こうした真鍮の輪によって美しくなり，腕の輪は護身に役立つと，パダウン族の女性は信じている。

真鍮の輪を装着する伝統の起源ははっきりしないが，襲撃する山賊や他の少数民族に女性が誘拐されないように，パダウン族の男性が考案したという学者もいる。こうした輪が女性を魅力的でなくしているのか，あるいは各部位の輪にはさらに輪を連鎖して束ねる輪が付けられていることから，男性が女性を木や家に繋いで置けるようにしたものなのかは，わからない。あるいは，虎などの森の野生動物の攻撃から女性を守るためであるという説もある。また，パダウン族の起

源にまつわる神話と関連した風習であると信じている人類学者もいる。風と結ばれた龍がパダウン族を産んだことから，女性の首が長いのは，母である龍を真似たと言われている。

パダウン族は優れた農耕民族であり，どの村にも灌漑のための棚田がある。女性は，重い真鍮の輪を付けているにもかかわらず，多様な家事をこなす。水を汲み，畑を耕し，糸を紡ぎ，酒やその他の商品を売るために遠く離れた村の市場まで歩いていく。真鍮の輪は，女性たちの健康や運動を害しているようには見えないが，歩き方はどことなく不自然で，非常に高い声で話す。

ビルマに居住している多くのパダウン族は伝統的に精霊信仰者であり，無数の精霊を崇拝している。邪悪な精霊を鎮めるために生贄が捧げられ，友好的な精霊は祭りや祝い事に招く。近年，パダウン族の多くはカソリックに改宗し，多くの集落では，首輪の装着などを含めた伝統的な風習が，急速に減少している。

パダウン族の居住地域も，闘争や武装した民族主義運動によって大きな打撃を受けている。カヤン新領土党はパダウン族の村や周辺で軍事活動を行った。その結果，紛争やその他の圧力によって多くが難民としてタイへと送られ，そこで外国人旅行客相手に写真撮影のモデルとなり，生計を立てている。

ラタ族あるいはザヨウン族は，カヤー州とシャン州の境界付近のペコンやピンラウンから西に位置する松林に覆われた地域に居住し，カヤン族に属するとされている。敵が到達できないように，標高6,000フィートもの高山に村を築いている。パダウン族同様，米を栽培し，作物の発育は降雨量に左右され，何時間もかけて川から水を汲んでくる。

ラタ族の村には，長老や祈祷師が存在し，婚期や収穫時期の決定などの相談を受ける。ラタ族の人々は非常に迷信深く，女性あるいは動物が出産した時には，畑に出たり，狩猟に行ったりしてはいけないと信じている。階段に白い布を下げて，村人に出産を知らせる。この時には，外部者を村に寄せ付けなくなる。

ラタ族には，婚期に関する厳格な決まりがある。伝統的に，思春期を過ぎた少年は，ハウと呼ばれる共同住居に，未婚の男性親族と一緒に移り住む。男性と少年が畑仕事に行くときは，老人が留守番をし，女性は立ち入り禁止である。結婚するまでは，少年と少女が出会えるのは，葬式や畑仕事の間だけである。

結婚する前には，祈祷師のところへ相談に行く。祈祷師は竹の針が挿入されている鶏の骨で占う。鳥の大腿骨の右側が男性，左側が女性とされ，針が直立すれば良い兆候とされ，おおよそ合えば，まあまあ認められる二人であるとされる。合わなければ，また別の時にもう一度占われる。

結婚は，本人たちが幼少期の頃に両親によって決められている。最近まで，少年や少女にはその決定に口を挟む余地はなかった。両親の決定に賛同できない場合は，駆け落ちすることもできるが，ラタ族社会からは排除され，他の村からも受け入れられない。駆け落ちして村から離れた人々からなる村が，カヤー州に散在していると言われている。

お見合いが成立すると，新郎あるいは新婦自身が結婚費用を支払う。金額は，男性は30ルピー，

女性は 20 ルピーほどが相場だが，もっと高額の場合もある。ルピーはインドから流入し，中には百年以上前のものもある。ラタ族は一年のうちひと月の間だけ結婚することが許されており，祈祷師によって決められる。その月に結婚しなければ，翌年まで待たなければならない。

インバオ族は，カヤン・カレン族に属し，カヤー州のカンタラワディやボーレク地方に住んでいる。険しい山岳地ではなく平原を好み，自らを「草原の住民」と呼ぶ。かつては，カレンニー族と同じように，政治的にその州を治めていた四，五つの祈祷師の家系の支配を認めながらも，地元の自治は依然として村の指導者や長老に委ねられている。

カヤー族や他のカレンニー族と同じように，インバオ族には結婚に関して厳しい決まりがあり，たいてい一夫一婦制である。以前は，精霊崇拝をしていたが，この百年のあいだにほとんどがキリスト教に改宗した。それでも，年に一回，カヤー族はカレンニー族の精霊祭（Kathowbow）を祝い，男女が一緒に歌う。けれども，ラタ族は男性が歌い，それに女性が応えて歌う。

カレン州

カレン州はカヤー州の南に位置し，タイ西部の国境沿いにテナセリム地区まで広がっている。この地域には，カレン族に属する民族集団の人口の約四分の一が居住しており，ビルマに在住するおよそ百万人のカレン族の故郷である。1948 年のビルマ独立後，カレン族は自治権を主張し，1990 年代まで，主要な反政府軍であるカレン民族同盟（KNU）が，タイとの国境沿いの山岳地方を統治していた。しかし，近年のビルマ政府軍の勝利と KNU の内部分裂によって，KNU は基盤となる拠点をほとんど失った。

こうした長期の及ぶ闘争にもかかわらず，カレン族やカレン族に属する民族集団についての記録がビルマにはほとんどない。さらに驚くことに，カレン族はシャン族と並んで，ビルマ国内ではビルマ族に次いで二番目に多い。カレン族は，アヤカン山脈やデルタ地域からペグー山脈やシャン州とタイとの国境付近に至る下ビルマの広域に居住している。

人類学者や言語学者はカレン族には 20 以上ものサブ・グループがあることを確認しているが，一般的には，主に 4 つ，ソウ族，ポー族，カヤー族，カレンニー族に分類される。カレン族の 70 パーセント以上がソウ族とポー族に属す。居住領域や文化は，主要三大起源 ── イラワジ川流域，シッタン川流域，サルウィン川流域 ── によって異なり，そこからカレン族はビルマに移住してきたと考えられている。

カレン族はビルマに千年以上居住しているが，特に初期の歴史に関してはほとんど知られていない。カレン族の神話には，かつて先祖が渡ったとされている「流砂の川」について述べられている。これは，中央アジアに位置するゴビ砂漠の漂砂であるとする学者もいるが，彼らの旅した川沿いの砂丘を述べたに過ぎないと考えている学者もいる。カレン族の言語には，チベット・ビルマ語族とは異なった言葉もあるが，一応チベット・ビルマ語族に属するとされ，モン族との接触が長かっただけでなく，シナ・チベット語族の影響も受けている。

カレン族に関する信頼できる歴史的な記録は，19世紀にビルマがイギリスに合併された時まで遡り，カレン語が文字で書き留められた。カチン族やチン族と同じように，多くのカレン族がイギリス軍に加わり，キリスト教へと改宗したが，仏教徒も多く残っている。カレン族は，ビルマ王族たちの抑圧からの解放者としてイギリス軍を迎え入れたことから，イギリスの統治下で多くのカレン族が政治的，軍事的に高位の役職に就任し，カレン族とビルマ族との間に人種的分極化をもたらし，今日まで続いている。

大部分のカレン族は，ポー族とソウ族といった水稲栽培をしている農耕民族であり，ビルマ人と一緒に生活しており，平原や溪谷にあるモン族の村では，果物や野菜も栽培している。山岳地方では，狩猟が食料確保と同時に娯楽として行われている。カレン族は狩猟に特殊な訓練した猟犬を連れていくこともある。山地民カレン族は，象の扱いに長けていることでも知られている。彼らは象を捕獲し，訓練する。ビルマの象使いのほとんどがカレン族である。

平地民カレン族は，ビルマ族や他の住民と同じような住居にすんでいる。しかし，北部の山岳地帯には，カレン族が伝統的な長屋に住んでいる地域がわずかながら残っている。かつては，集落全体の20から30世帯が，一軒の家に一緒に暮らしていた。長屋の中は個室に区切られ，各部屋のベランダは，中央廊下に面している。家族が住むだけでなく，長屋には独身男性の部屋や客間もあった。

山岳部では，伝統的な農業が営まれており，仕事は男女平等に分担される。女性は，水を汲み，薪を集め，料理をつくり，酒を醸造し，布を織る。男性は，狩りをし，畑を耕し，木を倒し，家を建て，敷物や籠をつくる。縫い物，収穫，脱穀，籾殻の選別は男女問わずに行われる。

こうした地域では，精霊信仰が根強く残っており，人間の営みを支配している自然の精霊ナッや，暴力的な死に方をした人の幽霊や悪魔といった超自然的な存在を信じている。

カレン族は伝統的に，病気，死，事故などは精霊が人間の生命力を脅かして生じると信じている。この生命力とは，誕生前から存在し，死後も存在し続けると考えられている。けれども，生命力が肉体から離れると，病気になったり死んだりする。幽霊も同様に，他人の肉体を所有できると信じられている。

しかし，この百年の間の出来事が，多くのカレン族社会に決定的な文化的衝撃を与えた。ソウ・カレン族とポー・カレン族の20パーセントほどがキリスト教に改宗し，多くの改宗者が民族独立運動の指導者となった。カレン族の民族独立運動は，多勢の仏教徒にも強力に支持されているが，デルタ地帯のバセインやヘンザダー周辺では，多くのカレン族が現地のビルマ族社会に同化し，もはやカレン語を話さなくなっている。

東部の山岳地方だけは，カレン族文化がそのまま残っている。ドーナ山脈の南部には，上座部仏教社会の千年国王運動に触発されたカルトが今でも信仰されている。ラフ族の信仰するグーシャ・カルトと同様，キリスト教と仏教が混在し，「信仰の父」フー・チャイクと呼ばれる神聖な預言者が指導者として崇められている。こうした地域の村では，「白い弟」に盗まれた「黄金の書」

がカレン族に伝わる神話として口承されている。

この神話の普及は，19 世紀に多くのカレン族がキリスト教に改宗する後押しとなった。

そうした伝統的な生活様式が，消滅の危機に面している。カレン族の指導者によると，この 50 年間に及ぶビルマ軍の弾圧によって，カレン州の住民の三分の一が，故郷から強制退去あるいは強制移転された。

現在では，10 万人以上のカレン族難民がタイにいる。彼らの多くは，誰一人として住むことが許されなくなった最奥地の村から避難してきた。難民キャンプにいても，カレン族の男性は今も赤い衣服を着用していることから，見分けることができる。しかし指導者たちは，このまま平和が訪れなければ，次世代に文化を伝承できなくなると恐れている。

モ　ン　州

モン州は，マルダバン湾に面し，下ビルマのカレン州の西側に位置する。1948 年にビルマがイギリスから独立した後，カレン族が武装して中央政府に対立したのと時を同じく，モン族（Mon）もこの地がモン族の故郷であると主張し，その要求に応じてモン州が設立された。今まで，モン族の知識人や指導者の抱いている民族独立の要求を鎮圧する動きはほとんどない。この百年の間に，モン族の文化は，主流となったビルマ族文化に急速に同化している。モン族の指導者はモン族の人口を 400 万人と主張しているが，政府の発表では 100 万人ほどである。

1995 年，SLORC と新モン州党との間で停戦が合意されたが，多くの村人はビルマ国内の故郷を離れたままである。最近の統計によると，10 万人以上のモン族難民や不法入国者がタイ国内で生活している。タイには，先住モン族の集落もわずかに残っている。

モン族はモン・クメール族の子孫であり，東南アジアで最も初期から居住している民族の一つである。仏教と文字をこの地方に伝えたのは，ビルマのモン族である。ビルマ族や他のチベット・ブータン人が中央アジアを去って南方へ移住する前から，テナセリム山脈の両側に位置するシャム湾とマルタバン湾の沿岸の肥沃な土地に，モン族は居住していた。彼らがビルマとかつての古代シャムに流入した最初の移動民族であるとも考えられる。

かつてモン族は，スヴァンナブーミあるいは「黄金国」と呼ばれる王国を建国した。今日ではホンサワトイとして知られている。王国は主に三つの国，現在のタイ北部のハリプンチャイ王国，その南のドヴァーラヴァティ王国，そしてタトン王国から構成されていた。港湾首都タトンは現在でもモン州内の小さな町として存続している。

マルダバン沿岸を舞台に，モン族はインドやセイロンの人々と貿易や文化的接触を経験し，仏教が初めて伝えられた。9 世紀には，ペグーにモン族の街が建設された。もともとは Hamsavarti として知られているハンサ（ガチョウ）は，インド伝統ではブラフマーの乗り物であり，現在でも，飛んでいるガチョウがモン族独立の象徴である。高い支柱に掲げられ，モンの仏教寺院にも設置されている。何世紀にもわたって，ビルマ族や他民族の移住によってモン族は押しやられる

ようになった。千年にわたって下ビルマの大部分を統治してきたにもかかわらず，モン族の王国は徐々に没落していった。タトンはビルマ族，ドヴァーラヴァティ王国はクメール人，ハリプンチャイ王国はタイ・シャン族の手に渡った。そして，1757年にビルマのアラウンパヤー王がモン族指導者を打ち破り，遂にモン王国は独立性を喪失した。

イギリスは，19世紀にビルマを支配下においた当初，ビルマ族と対立関係にあるモン族を支援した。ところが結局，政府の公用語にはビルマ語を採用した。このことは，モン族の文化に壊滅的な打撃を与えた。わずか数十年のうちに，多くの地域でモン族としての歴史の形跡が消失した。ビルマ文化において重要な役割を担っているにもかかわらず，今日では公立の学校でも初歩のモン語すらほとんど教えられていない。地方の村では，僧侶や教師によって教えられているところもあり，モン語の復活をモン民族主義者は強く願っている。

モン族は，伝統的に平地に住む民族であり，家畜を飼育し，米や野菜を栽培する。典型的なモン族の村は規模が大きく，民家，穀物倉庫，家畜小屋，学校の役目も果たす寺院，仏像が置いてある建物などがある。対照的に，山岳地帯にいるモン族と関係のあるパラウン族は茶を栽培する。また，ワ族もモン族と近い血縁関係にあるが，焼畑農業と狩猟で生計を立てている。しかし，こうした異なる民族間における歴史的関連性は，言語にわずかに残っているだけで，ほとんど認められない。

ビルマ族文化に吸収されてしまったモン族文化の基盤となっているのが，上座部仏教である。仏教の僧侶はあらゆるモン族社会の生活で中核をなす役割を担っている。女性の僧侶である尼も存在し，男性の僧侶よりは地位が低いとされている。婚姻や葬式といった儀式の他にも，超自然的現象について相談を受けたり，占星術師としての役割も果たす。

ビルマ国内の他の仏教社会と同じように，伝統的な信条や儀式は残っている。男性あるいは女性のシャーマンは，ごくわずかな謝礼で，公私を問わず諸問題に助言する。地元の精霊を鎮めるために毎年開催される儀式や，家族の病気や災いを取り除くために個人の家で，精霊に肉体を乗っ取られている状態にあると言われている，精霊の踊りを執り行う。

モン族には，子どもの誕生にまつわる興味深い伝統が残っている。子どもが誕生するとすぐに，母親と赤ん坊を入浴させ，水に溶いたウコンを塗りつける。赤ん坊の肩と股関節を固定するのは，誕生したときには本来あるべき位置に固定されていないと，モン族は考えているからである。出産後三日間，母親は特別な火のそばで休み，熱い石を体に当てられる。

アラカン州の少数民族

アラカン州（ラカイン州）はチン州の西側に位置し，バングラデシュと国境を介し，ビルマ北東部のベンガル湾に面している。峻厳なアヤカン山系（アラカン・ヨーマ）によって中央イラワジ川平原から隔たれているため，アラカン州は他の地域から孤立し，北東に位置するインドと現在のバングラデシュと積極的に関係を持っていた。

推定300万人のアラカン族の起源には，諸説がある。最大勢力であるラカイン族がインド人の祖先と一緒になったビルマ族，あるいはビルマ族の特徴をもったインド人であると主張する人類学者もいるが，ラカイン族の民族主義者は別の人種であると信じている。ある伝説によると，この地域の最初の住民は，ビルマ語で「人食い鬼」という意味を持つ，ビールー族として知られている肌の黒い人たちだったらしい。こうしたことから，「人食い鬼の土地」という意味のパーリ語が変化して，アラカン州となったのかもしれない。

その後の東部インド大陸からの移住民によって，紀元前にはアラカン州一帯にヒンズー・仏教の王朝が栄えた。西暦百年ころには，ディンヤワディ王朝などの国々で神聖なる仏陀像が鋳造制作されるようになった。同時期にビルマに流入したビルマ族と類似した言語を話しながらも，ラカイン族は独立した王国を守り，壮大な年代記や物語を保持し，300年以上にわたって，百人以上の王がいたと言われている。

最初の首都はヴァイシャリにおかれたが，その後ムラウク（ミョーハウン）へと移り，1784年のビルマ族侵略まで，王朝が存続した。その時に，仏陀像がアラカン民族の独立の象徴として捉えられ，マンダレーに移動させられ，今日までそこにある。

ラカイン族の大部分は，アラカンに移住した最初の住人であると考えられているが，チン族と血縁関係にある山岳民族カミ族（ムル）は千年以上も前からアラカンに暮らしていたと主張している。マヤマジー族は5世紀ころにインドからアラカンに商人として来て，ムラウクに留まるようになったと言われており，15世紀から17世紀にかけて，ベンガルでの闘争から西へと逃避せざるを得なかったダインネッ族（もう一つの中国人系の民族集団）と共に，現在のバングラデシュからはテッ族が来た。

アラカン族は，1825年にイギリスの統治下におかれる前は，ポルトカル人とオランダ人からも強い影響を受けたが，今日論議を呼んでいるのは，隣接するイスラム教徒との関係である。アラブの商人や，かつてアラカン族が住んでいた近接するチッタゴンのイスラム教徒住民を通して，何世紀にも及んで，アラカン族はイスラム教の影響を受けた。しかし，第二次世界大戦の大混乱によって，人々は北部の国境付近へと大移動した。アラカン州（1974年にラカイン州に改名された）のおよそ四分の一が，今日でもイスラム教徒であると推定されている。しかし，この20年間でその二倍の25万人以上のロヒンギャ難民として知られるイスラム教徒難民が集団脱出し，当局による迫害を批判するイスラム教徒の多いバングラデシュへと逃げ込んだ。

イスラム教徒とラカイン族の反政府グループは，小規模ながら，国境付近の山岳地帯を治めていたが，1988年以降，SLORCが徐々に外国人の立ち入りを許可するようになった。主要産業は漁業で，アラカン州にはビルマ国内で三番目に大きい漁場がある。カラダン川，レミョー川，マユ川，ナフ川の四つの大河が，北部の低地に広がる稲作地域の豊かな水源となっている一方で，人里離れた山間部ではケシも栽培されている。

チ　ン　州

チン族は，インド北東部へと続くビルマ北西部にそびえる広大な山岳地帯を占有している。この地域は人口が少なく，ビルマにはおよそ150万人のチン族がいると推定されており，険しい地形のため開発，通信，交通の発達が阻害されている。

チン族（自称ゾミ）はチベット・ビルマ語族に属し，隣接するインドのミゾラム州にいるゾウ族と言語や文化の面では多くの共通点がある。チン語を話す人々は，ビルマ北西部，インド北東部，バングラディッシュ南東部に多く住んでいる。チン族は，西暦500年ころにビルマの平地までやってきていたとする学者もいる。13世紀になると，ビルマ族，シャン族，モン族の支配下における権力闘争によって西へと追いやられ，山岳地帯に入って行った。

チン族という名称は，「友人」という意味のビルマ語から派生したとする説もあるが，自称ゾウを主張するチン族の歴史学者は，ビルマ語の「籠」から由来していると主張している。ビルマ族がビルマ北東部に来たとき，籠を運んでいる人々を見て，その地の川をチンドウィン川（籠の溪谷)，民族をチン族と呼んだ。しかし近年のチン族は，主に商売の取引を通して，平地に住むビルマ族や隣接するインド人と接触している。

ビルマだけで，アショウ，チン・ボク，チン・ボン，レートゥー・チン族など40以上ものチン族やゾウ族のサブ・グループが，慣習や入れ墨などの特徴によって人類学者に確認されている。伝統的なチン族であるダインネッ族やカミ族は，アラカン州の境界領域に住んでいる。

チン族の占有している地域は，ほとんどが標高3,000から7,000フィートの山岳地方で，焼畑農業を営んでいる。狩猟の技術も高く，動物の生贄は精霊信仰の儀式で重要な役割を担う。山地民チン族は，特に金属製品の入手を，平地民のビルマ族などに依存してきた。布，蜜蠟，その他山岳地方の産物と取引する。

伝統的にチン族の女性は，鍛冶，家の建築，森林の伐採以外の村の仕事全般に携わっている。たいていは一夫一婦制だが，過去には裕福な庶民や貴族に一夫多妻制も認められていた。北部のチン族社会では，庶民と貴族の二つの階級に分かれている。南部のチン族社会では，饗宴で人々をもてなし，社会的地位を高める。

伝統的な精霊信仰も残っているが，19世紀末にイギリス人やアメリカ人のプロテスタント宣教師がインドとビルマの国境付近で布教活動を始め，半数以上のチン族がキリスト教に改宗した。

多くのチン族はイギリス軍に参加し，第二次世界大戦中に功績をもって尽くした。しかしその後のイギリス統治下時代に，チン族がインド北東部とビルマに分断されたことに，民族独立運動の指導者は不満を抱いた。ビルマ国内でも，紛争が続いていた。さらに1974年憲法によって，チン族の領域は一つの州としてしか認められなかった。

チン州は，ビルマ国内の多くの少数民族ほど，民族紛争や軍事闘争による打撃は，大きくはなかった。しかし，著しく貧困化し，開発が遅れた。1980年代後半，チン民族戦線として知られる

武装運動が，インドと隣接している北部国境付近で勃発した。そのため，チン州の大部分は，外部者の立ち入りが制限されている。

多くのチン族とミゾ族の指導者の目標は，独立した「ゾウ」国を設立し，以下の州に分けることである。東部ゾウはビルマのチン州，西部ゾウはバングラデシュ南東部とインドのトリプラ州，中央ゾウはインドのミゾラム州，北部ゾウはインドのマニプル州を含む領域とすることを理想としている。

ナ　ガ　族

ビルマ北部のパットカイ山脈は，チベット・ブータン語族に属する推定10万人いるとされるナガ族の故郷である。大部分のナガ族，おそらく100万人以上が，インドの国境周辺に住んでいる。インドでは1950年代以降，ナガ族の独立国家を目指して政治的運動が繰り広げられている。紛争はビルマ国内にも広まり，頻発する激しい闘争によって村人たちはより山奥へと逃げ込んでいった。歴史的に，ナガ族はビルマ政府の地図には載っていないが，ビルマの新憲法に基づいて，SLORCはナガ族の自治区の設立を検討している。

ナガ族の伝統や伝説は，移住の道筋を示唆している。何世紀にもわたって，ナガ族の多様な支族やその他の民族は，お互いに，あるいは内部で闘争を繰り返した。13世紀初期に，シャン族の長であるSukhapaがナガ族を支配すると，ナガ族は劣悪な扱いを受けた。

1832～3年，Manipur王がナガ族の領域を支配した。イギリス植民地自体には，

ナガという名称の由来ははっきりしないが，サンスクリット語で「山」を意味するナガ，あるいはチベット・ビルマ語族の言語で「人々」を意味するノックから来ていると考えている学者たちがいる。ごく最近まで，それぞれの集団でそれぞれの名称があり，ビルマではHtangan，Pyengoo，Haimi，Rangpan，インドではコニャック，アオ，セマ，アンガミと自称している。しかし，故郷の土地を取り戻すために互いの集団が接触するようになると，ナガという名称に統一されるようになってきた。

伝統的にナガ族は，山岳地帯の標高3,000から4,000フィートの山脚や丘陵に村を築いてきた。これは村を防衛するためであり，たいてい石壁や障壁が備わっていた。移動耕作を営んできたが，村は移動することなく同じ場所にあった。狩猟や漁業も営まれている。狩猟は食料確保のためだけでなく，娯楽としても楽しまれている。虎，豹，猪などを銃や槍，猟犬を使って捕らえる。小動物や鳥の捕獲に罠が用いられるが，落とし穴で象を捕まえるのは違法とされている。

何世紀にもわたって，ナガ族は険しい地形のために他の民族との交流はほとんどなく孤立していた。このため，村の内部あるいは集団内部の抗争は，他人の仲介を頼らず自力で解決することが求められてきた。また，布，籠，彫刻品などと自給することのできない品物を交換する以外は，自給自足の生活を営んでいる。織物は重要な産業の一つであり，多彩な色使いや模様でビルマ国内でも有名である。インドからの輸入品に押されがちであるが，多くの村では自家製の綿が用い

られている。

ナガ族の村には，未婚の男性が寝泊まりするmorungという住居があり，6，7歳になると入居する。結婚前の男女は畑仕事など一緒に作業し，婚前交渉にも寛大である。結婚費用は必要であるが，若者は結婚相手を自由に決められる。

ビルマやインドのナガ族の中にはキリスト教に改宗した者もいるが，土着の宗教は依然として根強く残っている。ほとんどの伝統的な宗教儀式は，豊作を祈願したものである。特定の日に，神聖な土地での様々な活動が宗教的な理由から禁止されている。最も重要な儀式は，個人あるいは村のgennaであり，その期間は外部との接触を避ける。Gennaはまた健全な社会，あるいは近隣集団との平和的な関係を確実にするために行われる。神の魂は日の出の方向へ，悪魔の魂は日の沈む方向へ進んでいくと信じている者もいる。

ビルマ族

ビルマの中央平原は，伝統的にビルマ族の居住地である。ビルマ族はビルマの人口の約三分の二を占めるビルマ最大の民族集団であり，チベット・ビルマ語族に属する。9世紀ころにマンダレー地方に居住し，それから200年ほどかけて南部，南西部，北部へと拡散していったと考えられている。

ビルマの南方へと入り込むときに，初期のビルマ族移民は中央イラワジ溪谷に暮らしていたピュー族などの他のチベット・ビルマ語族を吸収していったようだ。それよりも南方にはモン族が勢力を誇っており，数世紀にわたって下ビルマはビルマ族とモン族との権力闘争の戦場と化した。

ビルマ族の王朝は，軍事的かつ宗教的に重要な場所であるイラワジ川の近くにあるパガンにあった。11世紀には，ここからアノーヤター王がモン族の支配するタトンを襲撃した。

こうしてビルマの歴史上，黄金時代が到来し，ラオス，シャム，インド北東部にまで領土を拡げた。1287年にパガンがクビライ皇帝のモンゴル軍に略奪されたが，その後首都をタウングー，アヴァ，ザガイン，マンダレーに移した。

その後数世紀にわたって，中国人，シャン族，モン族，ラカイン族の支配者が闘争を繰り返した。しかし，18世紀になると，ビルマ族の指導者アラウンパヤー王が長年の夢であった独立を勝ち取り，1753年にはモン族をアヴァから追い出した。アヴァを制圧した4年間で，モン族の首都ペグが陥落した。およそ三十年後には，ラカイン族の王朝も倒された。同じ頃，ビルマ族は長年トボヤン族が居住していたテナセリムにまで領土を拡大していった。

三度の戦闘を経て，イギリスはビルマを合併したが，ビルマ族の拡散を止めるものではなかった。イギリスの統治下で，ビルマ族はイラワジ川流域のデルタ地帯に居住するようになり，稲作をして輸出するまでになった。ビルマ族は川や道路沿いに集落をつくり，その周りには畑，水田，寺院，墓地がある。どの村にも，レスト・ハウスとパゴダがあり，小さな精霊の家が木陰につく

られる。民家は木製で，高床式である。正面玄関は来客用であり，裏口は料理や洗濯に使われる。二階建ての家では，女性は男性よりも上の階で寝ることは許されない。

60 年間，ビルマはインドの一つの州として，イギリスの統治下にあった。イギリスは，二重構造の統治制度を築いた。人口の半数以上を占めるビルマ族が優勢の「ビルマ政府」と，少数民族の居住地域を治める「フロンティア・エリア」に二分された。短期間ではあるが日本帝国による占領後の 1948 年に，ビルマは独立し，一つの国として統合した。ビルマ語が公用語となり，少数民族から数名の大臣が任命されたが，内閣の大半はビルマ族が占めた。このため，多くの少数民族の地域では，武装した反政府組織が存続するようになった。

しかし，ビルマ族の文化は，多くの影響を受け続けている。ビルマ王朝は 16 世紀からポルトガル，フランス，イギリスと交流があり，19 世紀から 20 世紀には中国やインドから移民が流入してきた。その何世紀も前から，言語，衣服，食べ物，道具，医療，芸術，建築，政治など多岐にわたって中国やインドの文化を取り入れ，また，少数民族，特に仏教徒であるモン族やシャン族といった民族集団からも影響を受けてきた。これらが混ざり合って今日のビルマには多彩な文化が生み出された。

しかし，ビルマ王朝独自の文化が存続しているものもある。その一つに，古典歌謡であるアユタヤ歌謡がある。これは，1700 年代後半にスィンビューシン王に捕えられたタイの囚人から伝えられたと考えられている。糸操り人形劇のヨウッテー・ポエーは，19 世紀初期に発展したものである。糸操り人形劇は舞踊劇の先駆けとなり，1930 年代に劇場が出現するまでは，人気があった。ビルマ特有の歌謡音楽もあったが，スィンビューシン王時代のタイの囚人から古典音楽も伝わった。街頭演劇であるポエーは，ビルマ人の日常生活に欠かせないものであり，長い歴史がある。劇は，宗教祭典，結婚式，葬式，出家の儀式，スポーツ式典などに際して，屋外で演じられる。演目は喜劇から悲劇まで様々である。

ビルマ族と多様な民族集団の影響を受けているビルマ文化を象徴する代表的なものに，ラングーンの高さ 326 フィートのシュエダゴン・パゴダがある。2500 年前に建築されたシュエダゴン・パゴダは，仏教徒から崇拝され，かつてのモン族の居住地域に存在している。黄金に輝く仏塔には，60 トンの金箔で覆われている。パゴダの上部にはダイヤモンドが 5,000 個以上飾りつけられ，風が吹くと 1,000 個の金の鐘，400 個の銀の鐘が煌めく。最上部には 76 カラットのダイヤモンドが飾られ，キプリングに「瞬く驚異」と評されたことは有名である。

シュエダゴン・パゴダにまつわる伝説には，インドを旅した時に聖なる菩提樹の下でブッダに出会った二人の商人が登場する。二人は旅の食料として携えていたハチミツなどを差し出した。そのお礼としてブッダは自身の聖髪 8 本を与えた。二人は途中で出会った王にその聖髪 4 本を渡し，残りの 4 本をダゴン（ラングーンの遺跡）のオカラパ王に献上した。王はそれを聖なるシングッダヤの丘に奉安した。数世紀を経て発掘された時には，奇跡的にブッダの聖髪 8 本すべてが容器に収められていたと言い伝えられている。

ジェームズ・ヘンリー・グリーン（1893～1975）

ヨーロッパから遠く離れた地域の人類学的調査は，ヨーロッパ諸国の帝国統治に従事した行政官，軍人，宣教師などによって始められた。ジェームズ・ヘンリー・グリーンは，1918年にインドの軍人としてビルマに配属され，20年もの間ビルマの山岳地帯で過ごした。任務のためヨーロッパ人未踏の地へと赴いた彼は，そこで出会った現地の人々にすっかり魅了され，人類学的研究を始めることになる。その観察に基づいて，1934年にケンブリッジ大学に論文 'The tribes of Upper Burma north of 24 latitude and their classification' が投稿された。

彼は，民族によって異なる風習，信条，言語，体格について調査し，人類学的手法に基づいて記録した。しかし，単なる民族鑑定にとどまることなく，関心と興味の尽きることがなかったことが，1,500枚にも及ぶ写真記録から伝わってくる。1920年代のビルマの貴重な記録である。

1975年にグリーン氏が亡くなった後，彼の名前で基金が設立され，彼が収集した織物や写真が管理されるようになった。1992年には彼の業績がブライトン博物館へと移され，グリーン・センターが設立された。

ジェームズ・ジョージ・スコット卿（1851～1935）

J.S.スコット卿は，ビルマのイギリス領植民地の行政官であり，現地の人々の歴史や生活を記録したことで知られている。

ラングーンに滞在中，デイリー・ニュースに上ビルマの政治的問題について 'Our Special Correspondent' と題して投稿した。1882年には，シュウェイ・ヨーというペンネームで『ビルマ民族誌』2巻を発表し，ビルマ社会と文化に関する重要な資料として評価された。

1886年にビルマがインド帝国の一つの州として組み入れられた後，スコットはビルマ・コミッションの一員として，治安の不安定なシャン州の行政官となった。その後の著書には，『上ビルマ・シャン諸州地誌』5巻（1901年），『ビルマ　ハンドブック』（1906年），『Burma and Beyond: A Ragbag of Races』（1932年）などがある。